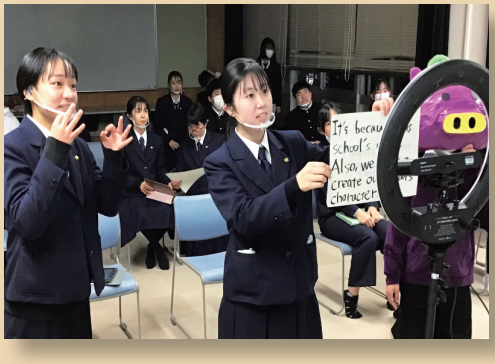
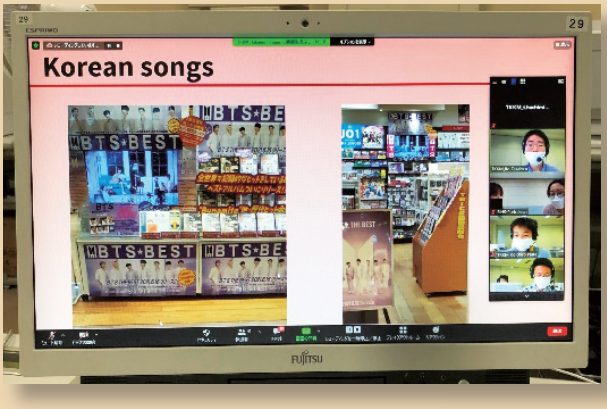
附属学校国際教育推進委員会報告書（第 13 集）

～ 2021 年度～

附属学校群の国際教育の推進





2022 年 3 月

筑波大学附属学校教育局

附属学校国際教育推進委員会

目　次

１．はじめに
筑波大学附属学校群における国際教育実践研究
副学長・附属学校教育局教育長　溝上智恵子 …… 3
２．附属学校の国際教育 …… 4
３．共通コンセプトに基づく附属学校の国際教育の取り組み等 …… 6
４．各附属学校の国際教育活動
⑴　コロナ禍でできる国際教育活動の模索
（附属小学校）…… 10
⑵　コロナ禍における国際教育活動
（附属中学校）…… 12
⑶　グローバルシチズンの育成を目指して
（附属高等学校）…… 15
⑷　2021 年度国際交流プログラムにおける生徒のオンライン交流での活躍
（附属駒場中・高等学校）…… 19
⑸　WWL 最終年度を終えて
（附属坂戸高等学校）…… 26
⑹　グローバル社会で活躍する視覚障害当事者の育成を目指して
（附属視覚特別支援学校）…… 31
⑺　多様な国際交流
◆フランス語・英語・日本語、フランス手話、日本の手話を用いた多言語交流
◆絵画やデザイン、工芸の作品交流
（附属聴覚特別支援学校）…… 35
⑻　附属大塚特別支援学校の国際教育の取り組み
（附属大塚特別支援学校）…… 39
⑼　国際的視野の獲得と自己発信の方法を探る桐が丘 ―オンライン交流を通じて―
（附属桐が丘特別支援学校）…… 43

５．各附属学校のイングリッシュルーム活動
⑴　子どもたちの充実した国際理解教育に向けて
（附属小学校）…… 47
⑵　今年度の English Room 報告
（附属中学校）…… 49
⑶　今年度のイングリッシュルーム活動
（附属高等学校）…… 50
⑷　English Room：日常活動および海外研究発表とその先の支援
（附属駒場中・高等学校）…… 51
⑸　楽しい英語活動と WWL 校としての活動の両立を目指して 2021-2022
（附属坂戸高等学校）…… 52
⑹　附属視覚特別支援学校のイングリッシュルーム
（附属視覚特別支援学校）…… 53
⑺「わかった、伝わった、楽しい」イングリッシュルームを目指して
（附属聴覚特別支援学校）…… 56
⑻　知的障害特別支援学校におけるイングリッシュルーム活動
（附属大塚特別支援学校）…… 58
⑼　持続的に児童生徒の国際的好奇心をくすぐるイングリッシュルーム online の在り方
（附属桐が丘特別支援学校）…… 59
６．おわりに
本学附属学校のコロナ禍での国際教育を振り返って
附属学校国際教育推進委員会委員長　濱本悟志 …… 61
（資料）附属学校の国際交流協定締結状況 …… 62
報告書発行の記録 …… 67
委員会名簿 …… 68

1. はじめに
筑波大学附属学校群における国際教育実践研究

副学長・附属学校教育局教育長　溝上　智恵子

2021 年度は、昨年度に続き COVID-19 感染症拡大により、多くの移動と宿泊の伴う行事は中止となり、海外派遣も海外からの受入れも実施できなかった。このような状況下で、国際交流を継続させていく方策に多くの学校が頭を悩ませた１年であった。窮地に追い込まれた時の創意工夫を報告することは、国際交流の新たな在り方を作り出す契機ともなる。このような思いから、第 13 集を刊行し、お届けすることにした。

筑波大学附属学校群は、今年度が最終年度となる第３期中期計画・中期目標（2016 ～ 2021 年度）において、以下のような国際教育およびグローバル人材育成に関する実践研究を進めてきた。

①スーパーグローバルハイスクール事業（SGH）や国際バカロレア教育システムの構築、附属学校教育、大学教育を通じてグローバル人材を育成する。

②スーパーグローバルハイスクール事業や国際バカロレア教育による高大連携を通したグローバル人材育成システムの構築、及び教育系の大学院と組織的に連携し高度な専門性をもつ教師の育成システムの構築を行う。

③先導的教育拠点、教師教育拠点、国際教育拠点の成果を活かし、全国の大学・附属学校と「コンソーシアム」を構築し、グローバルな素養を育てるカリキュラムを開発・提案する。

これらの中核であった文部科学省によるスーパーグローバルハイスクール事業（SGH）は、2018 年度をもって終了となり、その後継事業として 2019 年度より、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業が開始され、本学も SGH に続き採択された。さらに全国の幹事管理機関を委託され、WWL 事業によるグローバル人材育成の全国展開において重責を果たしてきた。

この WWL 事業では、附属坂戸高校を拠点校として、附属高校、附属駒場高校ならびに特別支援学校の高等部も加わり、本学大学教員のリソースを活用した高大連携を果たしながら、国際教育・グローバル人材育成の探究型カリキュラム開発に取り組んできた。この事業のコンソーシアムには、国内外の高校や大学ならびに東南アジア教育大臣機構等とも連携する、きわめて大規模で重厚なネットワークが構築できている。国内外でのフィールドワーク等を通して、生徒たちが学びと交流を進めている。

本学附属学校群は、従前から国際教育実践研究を継続してきている。附属学校群には３つの拠点構想に基づく実践研究があり、そのうちのひとつが「国際教育拠点」である（他の２つは「先導的教育拠点」「教師教育拠点」）。これは、「社会の要請に基づく、国際的視野をもった基礎学力の修得や生涯学習体系の基礎モデルとなる先導的な初等・中等教育拠点を形成する」という中期目標に沿って、「自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養い、積極的に外国の人とコミュニケーションを取る態度を養う」ことを目指している。

最後に国際教育に限らず、今日、教育実践にあたってはその成果検証が求められる。では教育の成果を適切に測定するとは、どのように行うと可能になるのだろうか。これは教育における永遠のテーマかもしれないが、避けて通ることのできない課題でもある。本学附属学校群が展開する様々な実践研究を、成果検証という視点から再考することによって得られる知見を、2022 年度から始まる第４期中期計画・中期目標（2022 ～ 2027 年度）期間における取り組みに生かして行きたい。

2. 附属学校の国際教育

国際教育の推進の必要性

なぜ、国際教育は必要なのか？

「ヒト」や「情報」が国境を越えて高速移動している。このため、国際化に対応した能力は、一部の人だけではなく、**誰にでも必要な能力**となってきている。このような社会の中で活躍できる人材を育成することが附属学校の使命。

取引先の担当者が外国人だけど、どう接したらいいの？

海外勤務になったけど、異文化になじめるの？

海外に支店や工場をつくることになったけど、日本とは何が違うの？

グローバル社会で求められる能力とは？

例えば、異なる国や文化の人々と臆せず積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や、相手の文化的・社会的背景を踏まえた上で、相手の意図や考えを的確に理解し、自らの考えに理由や根拠を付け加えて、論理的に説明したり、議論の中で反論したり相手を説得したりできる能力などがあげられる。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感、使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

国際社会における筑波大学の使命

●21世紀において国際社会へ向けて果たすべき本学の役割は，
(1)高い研究レベルに裏打ちされた「知の蓄積と発信」
(2)国際的リーダーとなる人材の輩出
(3)国際的な連携の構築
であると考える。

●筑波大学は，急速にグローバル化が進む世界情勢のなかで，世界をリードする研究型大学としての使命を果たすために，未来を切り拓く知の創造を通じて，地球規模課題に対する解決策を提示することを目指す。

附属学校における取組

「国際化対応能力を培う国際教育拠点」をかかげ、各校の特色を生かした国際教育を推進

国際化対応能力を培う

国際教育拠点

附属の共通コンセプト

●幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養うとともに、積極的に外国の人とコミュニケーションをとる態度を養う。
●教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために出来ることを考える。

各校の特色を生かした人材育成

【小中高】

小中高での全人教育を通して、世界をも視野に入れた多様な社会で活躍できるように、確かな教科教育、多彩な学校行事や児童生徒の諸活動に裏打ちされた自主的・自律的・自由な人材を育成する。

【駒場】

トップリーダー育成の一助として国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材育成を図る。

【坂戸】

総合学科ならではの多角的な国際教育を通し、持続発展可能な社会の実現に向け、地球的課題に対し主体的に考察・行動できる人材を育成する。

【視覚】

国際交流等により国際性を身に付けた人材を育成する。

【聴覚】

国際交流でのコミュニケーションを通し、異文化を理解する人材を育成する。また日本語のみならず、海外の言葉にも興味・関心持つ人材を育成する。

【大塚】

外国の人と共に活動し、仲良く楽しむことができる。外国の人とのふれあいを通してスムーズに交流できる。

【桐が丘】

国際交流の経験を糧に、国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲のある児童・生徒を育成する。

【久里浜】

子どもの興味関心に応じた触れあいから、外国や外国人について親しみを持ち、相手を知ろうとする気持ちを育む。

3. 共通コンセプトに基づく附属学校の国際教育の取り組み等

		小学校	中学校	高校	駒場中・高校	坂戸高校
共通コンセプト		幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養うとともに、積極的に教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために				
各校の国際教育の目標（国際教育を通じて育成する生徒像）		各校の特色を生かし				
		小中高での全人教育を通して、世界をも視野に入れた多様な社会で活躍できるように、確かな教科教育、多彩な学校行事や児童生徒の諸活動に裏打ちされた自主的・自律的・自由な人材を育成する。			トップリーダー育成の一助として国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材育成を図る。	総合学科ならではの多角的な国際教育を通じ、持続可能な社会の実現に向け、地球的課題に対し、主体的に考察・行動できる人材を育成する。
（国際教育を通じて広がる教師力）		・諸外国の児童・生徒の実態、教育事情を実際に体験することで、世界に誇ることができる日本の教育の特色（長・短を含む）を再認識することができる。 ・プレゼンテーション能力を向上することができる。	・現地の授業・生活を直接体験することで、教師に求められる指導力や指導の方法が国によって異なったり、国を越えて共通していたりすることを理解する。又教師自身が他国との交流を通じて国際社会の現状の一端を実感する。	・教師の語学力向上を図るとともに、他国の文化を尊重できる国際的な感覚を身に付ける。 ・日本の文化を他国の人々に紹介できるスキルを高める。	・教師の語学力を高めるのみならず、海外との交流を通じて異文化理解を深める。	・教科の枠を超えた協働により、教師それぞれが持つ知見を活かしながら、地球的課題を意識した教育を行う力を身につける。
（国際貢献）		・国内へ発信している教育成果を海外教育技術支援へ活用。	・国内各地へ発信している教育技術や、教師教育の成果を海外の先生方とも共有する。	・国内へ発信している教育成果を、海外へも発信する。	・海外、とりわけアジア諸国の学校の生徒と研究発表を行うことでお互い切磋琢磨することができる。同時に文化的な交流をし、お互いの理解に貢献する。	・本校との協働を通し、アジアの各校に対して本校とともに持続発展可能な社会のあり方について考える機会を与える。
取組（令和元年度）	幼児児童生徒	・ハワイ大学附属小学校、附属高等学校との児童交流会、親子20組参加 ・同時期にワイキキ小学校との交流会も実施 ・北欧授業交流（デンマーク、リンビートーベック市との提携による授業研究会） ・筑波大学外国人留学生との交流会	・アメリカ短期留学（West-Mont Christian Academy）に36名が参加 ・シンガポール短期留学（Hwa Chong Institution）に1名が参加（附属高校と合同で実施） ・深圳中学、龍崗初級中学が訪問。生徒同士の交流会も実施。	・国際学術シンポジウム（HAS）に生徒派遣3名、韓国。 ・アジア太平洋青少年リーダーズサミット（APYLS）に生徒派遣3名、シンガポール。 ・プリンスエドワード島大学へ生徒派遣16名、カナダ。 ・国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム、生徒派遣2名、フランス。 ・日中高校生交流（北京）生徒派遣9名、ホームステイ受け入れ10名。中国北京市。 ・Hwa Chong 校との交換留学、生徒派遣9名、ホームステイ受け入れ9名、シンガポール（生徒派遣については、コロナウイルスの影響で延期予定） ・各種国内会議（高校生国際 ESD シンポジウム、全国高校生合同フォーラム、クーベルタン嘉納ユースフォーラム、模擬国連など）において生徒発表。	・筑波大学外国人留学生との交流（文化祭訪問） ・さくらサイエンス・ハイスクールプログラム「大隅博士特別講演」4月23日（火）インド他の高校生と引率者、合計112名が来校。 ・台中一中の本校訪問（5月28日（火）） ・台中一中訪問 2019年12月10日（火）～15（日）（高1・4名、高2・12名）理数を中心とした研究発表交流 ・国際学生科学フェア2020（ISSF）、2020年1月15-20日（Thailand）（2名） ・釜山国際高校、本校訪問1月16日（高校生16名） ・釜山国際高校訪問 3月24日～28日（高1・6名、高2・6名）発表活動・文化交流他	・AIMS 留学生33名と交流 ・JST さくらサイエンスプログラム　タイ・インド・ブルネイから高校生団体55名受け入れ ・台湾・新竹縣立湖口高級中學生徒28名教員2名受入 ・「国際フィールドワーク」実施、生徒7名 ・姉妹校、コルニタ高校訪問 ・インドネシア 姉妹校へ2名1年間留学 ・オーストラリア夏季研修プログラム　生徒18名、教員3名参加 ・WWL 事業「高校生国際シンポジウム・The 1st SDGs Global Engagement Conference @ Tokyo」本校生徒による企画・運営実施 ・フィリピン大学附属ルーラル高校スタディツアー　生徒2名教員1名受け入れ ・卒研支援プログラムで韓国へ生徒1名渡航 ・台湾臣民高級中学校に1名1年間留学

R2.2

視覚特別支援学校	聴覚特別支援学校	大塚特別支援学校	桐が丘特別支援学校	久里浜特別支援学校
外国の人とコミュニケーションをとる態度を養う。 出来ることを考える。				
た国際教育の取組				
国際交流により国際性を身に付けた人材を育成する。	国際交流でのコミュニケーションを通じ、異文化を理解する人材を育成する。	外国の人と共に活動し、仲良く楽しむことができる。 外国の人とのふれあいを通じてスムーズに交流できる。	国際交流の経験を基に国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲。また、その実践の場を校外にも求める主体性のある児童生徒を育成する。	子どもの興味関心に応じた触れ合いから、外国や外国の人について親しみをもち、相手を知ろうとする気持ちを育む。
・外国文化の研鑽を深める機会となる。 ・国際教育を通じて、グローバルな視野、コミュニケーション能力を身につける。	・教師自身の視野を広め、語学力の向上を図る。そして聴覚障害教育の国際教育拠点の学校として、海外に発信できる力を身に付ける。	・外国文化の研鑽を深める機会となる。 ・国際教育を通じて、グローバルな視野、コミュニケーション能力を身につける。 ・日本の文化を他国の人々に紹介できるスキルを高める。	・国際教育を推進する過程を通して、他国教師らとの間に信頼関係を築き、人的ネットワークを広げていこうとする。 ・国際感覚・国際コミュニケーション能力を身につける。	・教師のコミュニケーション能力を向上させ、新しい知識や技能を身に付けるきっかけとする。
・アジア諸国の視覚障害教育発展に寄与。 ・アジア諸国の視覚障害者職業自立推進に寄与。	・聴覚障害教育における指導法や教材教具の有効活用を具体的に国外の教育現場に提供する。特にフランスやアジア諸国に発信する。	・知的障害児教育に関する指導法や教材教具の紹介。 ・海外からの研修生の受け入れおよび授業研究の協力。	・我が国の肢体不自由教育が培ってきた知見・技術等を他国の教育関係機関に向けて発信する。	・自閉症児教育に関わる海外の特別支援学校関係への成果発信。
・ダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業で高等部生徒２名がイギリスで研修、インクルーシブ教育で学ぶ視覚障害生徒やパラリンピック金メダリストとの交流、英国盲人協会訪問など ・トビタテ！留学JAPANのプログラムでタイ視覚障害者支援クリスチャン財団の盲学校で留学、交流とホームスティなど　高等部生徒１名	・フランス国立パリ聾学校とのスカイプ交流 ・フランス国立パリ聾学校へ高等部普通科生徒９名と教員を派遣し、交流 ・高等部専攻科造形芸術科の臺北市立啟聰學校と國立臺南大學附屬啟聰學校との作品交流 ・韓国ソウル聾学校とのスカイプ交流	・台湾国立屏東特別支援学校高等部の生徒８名と本校高等部の生徒23名が、ライフキャリア学習（作業学習）での授業交流 ・給食で海外の料理を体験；「オリパラ給食デー」の実施 ・中学部および小学部におけるALTの教員による英語の授業の実施	・台湾 国立南投特殊教育学校、国立和美実験学校へ訪問　生徒１名 ・韓国 広州セロム学校へ訪問　生徒１名 ・海外渡航した生徒代表による台湾・韓国国際交流報告会 ・台湾 国立和美実験学校とのネットワーク回線を用いた授業交流 ・韓国 広州セロム学校とのネットワーク回線を用いた授業交流 ・IOC Youth Summitへの参加 生徒２名 ・筑波大学外国人教員研修留学生７名（インド１名、モンゴル１名、ブラジル１名、ペルー１名、クロアチア１名、マラウィ１名、ナイジェリア１名）と高等部生徒との国際交流	・海外からの見学者との交流 （タイ教育関係者見学（33名）、中国障害児インクルーシブ教育特別研修（23名）、日系協会日系日本語学校（７名、ブラジル、ベネズエラ、パラグアイ、アルゼンチン）、中国長沙市特殊教育学校教員研修（５名）、韓国国立特殊教育院（３名）、中国広東省第二師範学院教員研修（５名）、中国教育国際交流協会（25名）、フィンランド教育委員会（１名）、JICA日系社会研修（15名、ブラジル、アルゼンチン）

		小学校	中学校	高校	駒場中・高校	坂戸高校
取組（令和元年度）	幼児児童生徒			・海外派遣生徒を対象としたネイティブ講師による放課後研修、郊外から講師を招聘して韓国講演会、シンガポール講演会の実施		
取組（令和元年度）	教師国際貢献含	・北欧授業交流（デンマーク、ポルトガル）に４名の職員が参加参加 ・インドネシア教育大学視察団による授業参観（20 名） ・タイコンケン大学研究会参加（20 名） ・ロシア、カザフスタン、ウズベキスタン授業参観（10 名） ・マレーシア視察団参観（22 名）	・北京中国国際交流協会より参観 ・マレーシアサラワク州より教育大臣視察	・日中交流ホームスティ 10 名受け入れ ・シンガポール、ホアチョン校から生徒９名＋教員２名来校、交流 ・海外からの教育見学の受け入れ。 ・各種国内会議（高校生国際 ESD シンポジウム、全国高校生合同フォーラム、クーベルタン嘉納ユースフォーラム、模擬国連など）参加 ・オーストラリア教員研修と次年度国際合同フィールドワーク実地踏査、教員１名参加、オーストラリア。	・筑波大学外国人教員研修留学生訪問研修、12 名受け入れ・校内案内 ・さくらサイエンス・ハイスクールプログラム「大隅博士特別講演」４月 23 日（火）インド他の高校生と引率者、合計 112 名が来校。 ・台中一中の本校訪問の引率教員対応 ・台中一中訪問 2019 年 12 月 10 日（火）～ 15（日）（引率３名） ・国際学生科学フェア２０２０（ISSF）、2020 年 1 月 15-20 日（引率教員１名） 釜山国際高校、本校訪問１月 16 日（高校生 16 名）生徒受け入れ案内 ・釜山国際高校訪問 3月 24 日～ 28 日（引率３名）	・韓国ユネスコ国内委員会招聘事業で教員１名、韓国へ派遣 ・中国ユネスコ国内委員会招聘事業で教員１名、中国へ派遣 ・「国際フィールドワーク」インドネシアにて実施 ・留学生３名（タイ２名、台湾１名）１年間受け入れ ・「高校生国際シンポジウム・ＳＧＨ校生徒成果発表会」実施 ・ESD 推進ネットワーク全国フォーラム 2019 で教員１名登壇 ・SEA-Teacher プログラムでアセアン大学生の教育実習６名受け入れ
環境整備	現状	・多目的教室「未来の教室」の設置。	・英語が話せる者が常駐し、生徒が自由に活用できるイングリッシュルームの設置。	・イングリッシュルームの設置 ・ウェブ会議のシステム。	・高度情報化事業に伴い、スカイプなど利用して海外派遣先の生徒と校内残留生徒との交流を検討中。	・スカイプ。 ・多目的交流棟の設置。
将来構想		・英語専科教員の増員（小学１年生からの英語教育導入のため）。 ・継続的な財政的基盤を得て、渡航費・通訳費の確保をする。	・ＡＬＴとのティームティーチングを中心に、少人数での授業を展開する。	・ウェブ会議のシステム。 ・実習生・留学生等の受け入れのための宿泊施設。 ・本校生徒の海外留学、海外からの留学生受け入れのための奨学金制度。	・海外派遣で交流の確立している相手校とテレビ会議等で交流を定期的に行う。	・校内 Wifi の整備を行い、日常的に海外の学校と学びあえるようにする。 ・アセアンを中心にアジアの高校生向けの奨学金制度を創設し、坂戸高校で日本語学習を実施し、筑波大学に入学できるようにする。

視覚特別支援学校	聴覚特別支援学校	大塚特別支援学校	桐が丘特別支援学校	久里浜特別支援学校
	・韓国国立ソウル聾学校中学部生訪問に向けて教員５名派遣 ・アメリカオハイオ州立大学聴覚障害教育部門、オハイオ州立聾学校等の視察、研究交流会に教員３名派遣	・インドネシアの私立学校（チパガンディ特別支援学校）との教員間Ｗｅｂ会議の実施、研究授業における動画鑑賞、意見交換、指導案（翻訳済み）の共有	・中国厦門市日本特別支援教育使節団（12 名）の受け入れ ・香港 NAAC からの視察団（教育・福祉関係者 32 名）の受け入れ ・香港教育大学からの視察団（7名）の受け入れ	・受け入れ研修：中国長沙市特殊教育学校教員研修５名、中国広東省第二師範学院教員の研修６名 ・多くの見学の受け入れ（タイ教育関係者見学、中国障害児インクルーシブ教育特別研修、日系協会日系日本語学校（ブラジル、ベネズエラ、パラグアイ、アルゼンチン）、韓国国立特殊教育院、中国教育国際交流協会、フィンランド教育委員会、JICA 日系社会研修（ブラジル、アルゼンチン）
・ウェブ会議システム。	・筑波大学内のウェブ会議システム。	・Web 会議の環境構築のために必要な機材（パソコン、Wifi、ポケット翻訳機、iPad）および現地通訳者の手配	・ウェブ会議システム。	・ウェブ会議のシステム。 ・図書館に海外絵本コーナーを設置。
・留学生支援の充実。 ・国際交流協定校との継続的な取り組みタイの生徒が本校で学ぶ短期留学プログラム制度を作る。 ・国際交流協定校を増やしていき、視覚特別支援学校の国際拠点校として発信を続けていく。	・学外へも公開できる「国際コミュニケーションルーム」の開設。 ・常設展と巡回展を行う。常設展には姉妹校のパリ聾学校・フランス関係の展示や児童生徒の調べ学習成果物・海外の絵本展示を行う。また巡回展として、11 附属巡回展のようなスタイルでの海外の衣食住、教育について紹介するスペースをつくりたい。	・継続的な授業研究における教員同士、生徒同士の海外交流。その為の、Ｗｅｂ会議における環境設定、予算等の確保	・ウェブ会議システムを活用した授業交流、情報交換を一層充実させる。 ・海外への教員派遣を拡充し、研究成果等の対外発信力を強化する。 ・北欧等の特別支援学校との交流を実現させる。	・海外からの講師招聘型研修会を定例化すると共に、内容を録画編集し、国内外に向けた研修データライブラリーを整備する。 ・テレビ会議等のシステムを利用して、 定期的に授業研究会等を行う。

（注）今年度の取組については、令和２～３年度の海外派遣及び受入が COVID-19 感染拡大により実施できなかったため、参考のために令和元年度の状況を記載しました。

4. 各附属学校の国際教育活動

附属小学校

コロナ禍でできる国際教育活動の模索

1．本校の国際教育の特徴

筑波大学附属小学校は、国内の教育研究校としての使命、責任感をもって教育研究を進めている。その成果を活かして、海外教育技術支援、海外教育技術交流を行い、相互の教育技術の高まりをめざし、国際教育を推進している。

本年度は、昨年度同様、新型コロナの影響が続き、渡航を伴った海外校との授業交流のプログラムは全て中止となった。ただし、収束後、速やかに交流再開ができるよう準備を進めている。北欧との交流は、2022 年 3 月実施予定から 10 月実施への延期で調整している。

一方で、昨年 11 月、12 月に感染予防を徹底し、筑波大学の留学生との交流会を対面で実施することができたことは大きな収穫であった。2020 年に実施したオンライン交流で参加していた留学生もおり、児童は実際に対面してのやりとりに充実感をもったようである。

また、オーストラリアのベルビューパーク小学校と交流を進め、ビデオレターや手紙のやりとりを通して、相互理解や異文化理解へつなげることができた。

2．活動報告

（1）海外校との授業交流　　デンマーク、アイルランドにおける授業交流（中止）
日韓授業交流（中止）

（2）児童の海外交流プログラム　ハワイ大学附属小学校交流（中止）

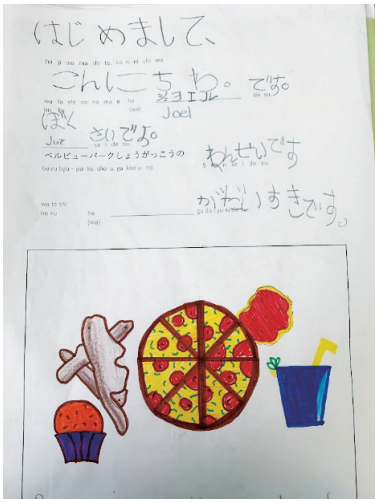
（3）児童の国際理解プログラム　オーストラリア　ベルビューパーク小学校との交流

オーストラリア、Bellevue Park State School との交流をはじめ、自己紹介のポスターを送ったり、紹介ビデオの交換を行ったりした。

まず、全校朝会で子どもたちに向けてオーストラリアから「Tomodachi project」と題されたビデオを紹介した。Bellevue Park の子どもたちは、日本語を学習しているので、日本語と英語を使って学校を紹介してくれたところにとても驚いた様子だった。それに返事を返すかたちで、英語を学習している高学年を中心に、自己紹介カードやポスターをつくり、送ることにした。また、学校紹介ビデオを作成し、オーストラリアの子どもたちに知ってほしいことを英語で伝える活動に取り組んだ。

この交流は、お互いに学習している言語を使っての交流のため、日本語を話してくれるオーストラリアの子どもたちに親近感を覚え、子どもたち自身も英語で伝えることに真剣に取り組む意識が高まっていた。多くの子どもたちが、オーストラリアに実際に行ってみたい、友だちになって話してみたいと感じていたようである。その後、オーストラリアの動物について伝えるビデオも送られてきたので、学習していた内容と絡めて日本の絶滅危惧種のビデオを作成し、交流を深めた。

ベルビューパーク小学校から送られてきた紹介ビデオ



日本語で書いてくれた手紙

附属小学校から Tomodachi Project としてビデオ制作

校長先生を英語で紹介

コロナ禍における国際教育活動

１．例年実施していた短期留学プログラム

中学校では例年春季休業中に２つの短期留学プログラム（アメリカ、シンガポール）を実施していたが、コロナ禍のため、一昨年度・昨年度に続き、今年度も両プログラムとも実施を見送らざるを得なかった。

（1）アメリカ短期留学プログラム

例年通りの計画を立てていたが、実施要項配布予定の７月末が、感染症の所謂「第５波」が急速に拡大し始めた時期と重なってしまい、事態収束の見通しが立たないことから、今年度もプログラム参加者の募集を行わないことにした。当初の予定は以下の通りである。

日　程：令和４年３月 20 日（日）～ 29 日（火）
対　象：２年生および３年生　合計 36 名（予定）
・本校生徒として責任ある行動がとれる者
・英語で積極的にコミュニケーションをとる意欲がある者
→一昨年度までは４月～ 10 月の応募までに、English Room に自主的に２回以上参加している生徒という条件があったが、昨年度・今年度は削除（時程変更のため）
・事前研修および春休み中の「事後まとめの会」に全て出席し、報告活動（レポート・ポスター作成、加えて２年生は HRH や説明会での発表など）を全うできる者
内　容：ペンシルベニア州でホームステイと授業参加、フィラデルフィア観光（予定）
West- Mont Christian Academy（キリスト教の私立学校）（予定）
本校教員２名が引率する他、添乗員が同行。現地にはコーディネーターが常駐。
今後の流れ：①夏休み前に実施要項配布
②９月中にオリエンテーション実施（ISA と日程を相談）
③ 10 月中旬に応募締め切り
④ 10 月末に選考
⑤ 11 月初旬に選考結果発表
⑥ 12 月より事前研修開始
参加費：約 40 万円（燃油サーチャージ代変動のため、変わる可能性がある）
新型コロナウィルスの影響について：
・各国の入出国制限、感染症危険情報レベル、現地および日本国内の状況等により、キャンセルせざるをえなくなった場合の対応についての詳細は、今後 ISA（International Student Advisor）や現地コーディネーターと相談した上で、オリエンテーションで周知する。
・航空券や現地滞在費のキャンセル料が発生しない時点で実施の可否を決定する。

（2）シンガポール短期留学プログラム

附属高等学校のプログラムに毎回中学生も若干名参加させてもらっていたが、現在は高校と同じく募集を中止している。

２．今年度実施した国際教育活動

（1）２年国語科での授業実践

今年度、11 月の本校研究協議会の中で国語科から中国の中学校との授業交流の様子が動画公開さ

れた（単元「漢文を読み継ぐⅡ－漢詩の心象風景を描いて－」）。

この単元では、筑波大学との共同研究の一環として、本校の第２学年の生徒と、中国の台州学院附属中学校の第２学年の生徒が漢詩の学習を通じた異文化交流を行った。具体的な学習内容は、主に朗唱ビデオの交流と、漢詩の鑑賞文の交流の二つであった。これらは両国の教員が事前にオンラインでの打ち合わせの中で作成した日本語と中国語の両方で書かれたオリジナルの冊子資料（「漢詩朗唱六選」、「漢詩鑑賞六選」）を学習材として用いた。

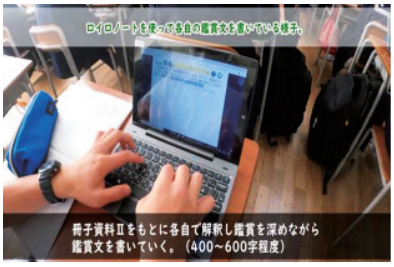
まず朗唱ビデオの交流では、冊子資料にある共通の漢詩をそれぞれ日本語と中国語で朗唱した様子を撮影したビデオを鑑賞し合って、その響きやリズム、特徴の違いについて考えていった。台州学院附属中学校から届いた中国語の朗唱ビデオは、とても技巧的で、かつ表現力に優れ、日本の生徒の心を打つものであった。またビデオに映る中国の生徒たちは、声だけでなく、表情や口の形、身振り手振りまで細かな工夫を凝らしており、本物の朗唱とはどのようなものかを考えさせられるものであった。一方の中国の生徒は、日本語で訓読して一斉に読む日本の朗唱ビデオの様子を見て、真面目さや真剣さを感じていたようであった。

次に鑑賞文の交流では、同じく冊子資料にある共通の漢詩を使って、第一人称から解釈して鑑賞文を書いていった。第一人称とは、生徒一人ひとりが詩人の目になって詩の世界に入り込み、そこに描かれた作者の心象風景を捉えていこうというものである。生徒たちは、遠く、時代と場所を隔てた漢詩の作者に自らを重ね合わせ、想像豊かに読み味わって解釈を深めることで、自らの心や頭に浮かぶ詩の世界のイメージの解像度を高めていった。完成した鑑賞文作品は、筑波大学大学院の中国人留学生らの協力を得ながら、日本語と中国語へ翻訳した上で読み合った。両国の共通の古典である漢詩を介して異文化交流を行うことで、生徒たちがグローバルな視点や素養を身につけていくきっかけにもなった。

なお、今回は、編集した朗唱ビデオをクラウド上で交換したり、生徒も鑑賞文の執筆と交流をGIGA スクール構想の実現により配備されたタブレット端末を活用して行ったりするなど、積極的にICT 機器の活用にも取り組んだ。特に鑑賞文をデータ化して扱うことで、短期間での翻訳と共有が実現し、生徒たちは教室内にとどまらず、海を越えて多くの鑑賞文作品を読み合うことができた。コロナ禍でさまざまな学習活動が制限されることも多いが、オンラインやICT 機器を活用することで、新たな学びの形と異文化交流の仕方を考える機会にもつながった。今後も、両校では共同で教科研究と授業交流を進めていく予定である。

日本の朗唱ビデオ

中国の朗唱ビデオ



タブレット端末の活用

（２）３年総合学習での取り組み

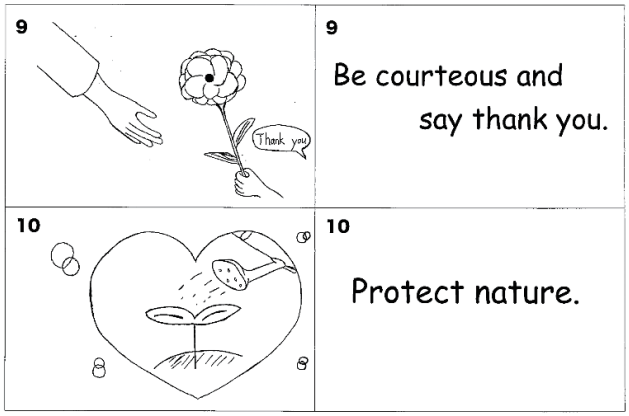
第３学年の総合学習Ｉコース「公平な地球社会への一歩を踏み出そう！ Part ２～世界の人々と共に生きるために」（英語科：中島真紀子教諭担当）では、自分たちの周りにある課題に目を向け、新たなプロジェクトを生み出して実行に移していくことを目指して学習を進めた。

その中の一つとして、アフリカのザンビア共和国のストリートチルドレンの保護施設や学校と繋がり、現地の子どもたちが必要としている教材を作成し、提供するというプロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトはザンビア共和国にてストリートチルドレンの保護、そして学校建設に携わっている日本人女性のムタレ・桜子さんと Zoom でつながり、ザンビアストリートチルドレンや孤児の現状

を知ることからスタートした。その際、ザンビアでは数学の学力に課題があること、そして道徳教育の概念がないということを知り、この２つの支援を可能とする教材（道徳かるた・かけ算九九の英語の歌）を作成することにした。案を出しては、ムタレさんにアドバイスをいただき、加除修正を加えながら最終的に出来上がったものを英語に翻訳し、完成となった。英語に翻訳する際には、英語のネイティブスピーカーの方と Zoom でつながり、英語のアドバイスもいただいた。かけ算九九の歌も、音楽に合わせて楽しく歌えるものを作成することができた。この２つの教材は実際にザンビアの学校にお届けし、今後使用していただく予定である。

この活動を通して生徒たちは「ひとりよがりの支援にせず、きちんとニーズを理解してプロジェクトをつくりあげていく」ことの大切さを学ぶことができた。実際に使っていただくことのできる教材を作成することができ、生徒たちの達成感も大きい活動となった。また、ホームページを作成し（https://www.makikonakajima.com）、プロジェクトの成果を配信できるようにした。

作成したカルタ



（3）異文化交流プログラム

アメリカ短期留学プログラムは今年度も中止となったが、実施予定だった春季休業の同時期に国内で代替プログラムを実施することにした。主な計画は以下の通りである。

日　程：令和４年３月 23 日（水）～ 25 日（金）
場　所：本校（桐陰会館他）、東京グローバルゲートウェイ（TGG）
対　象：２年生および３年生　合計 40 名（予定）
・本校生徒として責任ある行動がとれる者
・英語で積極的にコミュニケーションをとる意欲がある者
・事前研修と振り返りを含め、全てのプログラムを全うできる者
内　容：・諸外国から日本国内に留学している学生たちとの様々な活動（文化交流、ワークショップ、講義、体験学習、レッスンなど）
・体験型英語学習施設 TGG での英語研修（3/24）
当日までの流れ：
①11 月 17 日（水）16：00 ～　説明会：桐陰会館
②11 月 18 日（木）～ 29 日（月）　参加申込
③12 月上旬　参加者決定：　最終的に 33 名が参加決定となった
④事前学習：１月 22 日（土）、２月５日（土）、３月５日（土）　※ 2/5 はオンラインで実施
⑤２月中旬までに参加費支払
⑥（終了後）３月 30 日（水）までにロイロノートで振り返りレポートを提出
参加費：約４万円（予定）

グローバルシチズンの育成を目指して

本校の国際教育の特徴

異文化を柔軟に理解し、地球社会に参画する意識を持った「グローバル・シチズン」の育成を目指してさまざまな活動を行っています。また、本校の教育全般、特に総合的な探求の時間と併せて、課題を発見しその解決を図る実践を目指しています。2021 年度活動の報告によって具体的にお示しします。

2021 年度は、2020 年度と同様に新型コロナウイルス感染拡大の影響により、招聘・渡航による国際交流は実施できませんでした。日中交流は、渡航と招聘を第一の目的としていますので中止となりましたが、それ以外の他の国際交流は、以下の方法で実施されました。

〈対面方式による実施〉

1．シム・チュン・キャット先生のシンガポール特別授業

〈オンラインによる実施〉

2．アジア太平洋ヤングリーダーズサミット（シンガポール・APYLS）
3．ハナアカデミックシンポジウム（韓国・HAS）
4．プリンスエドワード島大学英語研修（カナダ）
5．シンガポール短期留学（代替交流）
6．ESD シンポジウム
7．高校生国際フォーラム

以下にそれぞれの報告を致します.

1．シム・チュン・キャット先生のシンガポール特別授業

「Diversity and Uniformity － How Tolerant and diverse should a society be? －」

2021 年 7 月 9 日（金）に、昭和女子大学のシム・チュン・キャット先生（注；毎年の交流でお世話になっている先生です）をお招きして、日本とシンガポールを比較しながら、多様性について考える特別授業を行いました。

参加者は 1 ～ 3 年生 20 名。

多言語多文化共生社会であるシンガポールは、外国人移民の受け入れや、宗教的少数者、性的マイノリティーに対し寛容です。それを可能にしているものはいったい何なのか。そして日本の社会はこれから先どうあるべきなのか。参加者は、互いに意見を交換しながら、思いを巡らせました。

２．アジア太平洋ヤングリーダーズサミット（シンガポール・APYLS）

７月 12 日～ 15 日の４日間、シンガポールの HWA CHONG INSTITUTION（HCI）主催の The 14th Hwa Chong Asia Pacific Young Leaders Summit（14th HC-APYLS）に本校の２年生３名（男子１名、女子２名）が参加しました。昨年に引き続き、HCI で「アジア太平洋青少年リーダーズサミット（APYLS)」として行われたサミットに代わって、オンラインで開催されました。日本からは、本校と麻布高校が参加し、11 カ国（China, Finland, France, India, Indonesia, Israel, Japan, South Africa, United Kingdom, the United States and Singapore）26 校から計 91 名の高校生が交流しました。全体テーマ「Re: Imagining, Building, Uniting」の元、各参加者は割り当てられた仮想国を、どのようにしてコロナ禍から立て直すことができるか、議論しました。

３．ハナアカデミックシンポジウム（韓国・HAS）

韓国ハナ高校主催のプログラムが今年度はオンライン実施となりました。『未来社会におけるロボット工学の役割』という全体テーマのもとに、３名ひと組の参加チームが自分たちの研究を発表し合うというものです。本校からは女子３名が『高齢化社会における介護ロボットの導入』という題目で発表を行いました。

４．プリンスエドワード島大学英語研修（カナダ）

毎年８月中旬から下旬にかけての２週間、カナダ東部のプリンスエドワード大学へ約 16 名の生徒が英語の研修とそのアクティビティーに参加しています。時差が約 12 時間のため、昨年度は実施をあきらめましたが、オンラインでの実施が可能だという情報を得て、2021 年度はオンラインにて実施し、10 名（男子１名、女子９名）の生徒が参加しました。８月 16 日から 27 日までの日程で行われ、土日を除く毎日の午後８時～ 10 時は英語の研修、火水木の午前８時～ 11 時にはアクティビティーが実施されました．英語の研修では、カナダにおける移民の動向と多文化主義、環境問題、カナダの歴史と文化について学びました。アクティビティーでは、シャーロットタウンのバーチャルツアーや地元の名所の紹介、上級生と一緒に楽しむアクティビティー等が行われました。

５．シンガポール短期留学（代替交流）

例年３月下旬、シンガポールのホワチョン校（HCI）へ約 10 日間、短期留学をしていますが、感染症拡大の影響により、昨年度と同様にオンラインによる交流が行われました。11 月 24 日午後４時 15 分～６時 15 分に行われ、関西大学高等部の生徒も一緒に参加し、わずか２時間だけではありますが、３校で有意義な交流ができ、本校の参加者女子７名は楽しく参加していました。自己紹介ビデオ

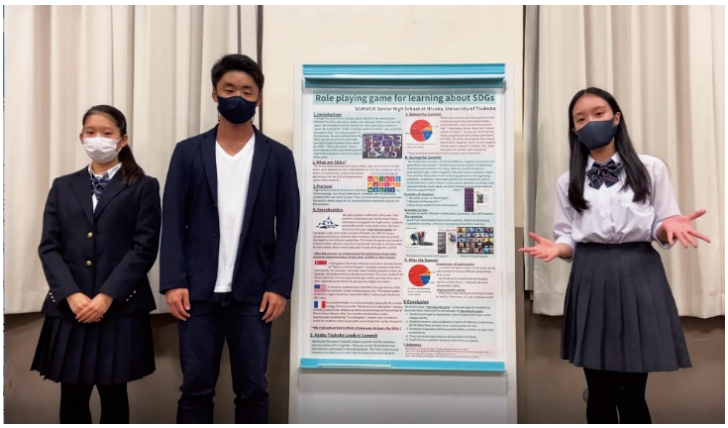
を作成したり、学校紹介ビデオを２週間で作成したりするなど、日本での学校生活の状況のプレゼンテーションを行いました。また、グループディスカッションを行い、アイスブレイクその他で楽しい交流の時間も持つこともできました。学校紹介ビデオは、参加者全員が創意工夫をし、手作り感あふれる作品となりました。本年度は、ホワチョン校の生徒たちが、有意義な交流ができるように様々な準備に取り組んでいたように思いました。

６．ESD シンポジウム

筑波大学附属坂戸高校主催のプログラムです。今年度はオンライン実施となりました。『行動するための 10 年―SDGs 実現のために残された時間はわずかだ―』という全体テーマのもとに、３名ひと組のチームが自分たちの研究を発表し合いました。本校からは上記 HAS に参加した女子３名が『高齢化社会における介護ロボットの導入』という題目で発表を行いました。

７．高校生国際フォーラム

2021 年 12 月 19 日（日）に、令和３年度「全国高校生フォーラム」が実施されました。昨年に引き続き、コロナウイルス感染予防のため、オンライン開催となりました。各参加校は、事前にプレゼンテーションを録画（約４分間、英語）したものを提出しました。本校からは、２年生の生徒３名（同年度の APYLS 参加者）が、「社会的環境と生活【教育・労働・人や国の平等・平和】」グループで、プレゼンテーションを行いました。「Role playing game for learning about SDGs（SDGs 教育に最適なロールプレイングゲーム）」というタイトルのもと、先に参加した APYLS や生徒が自主的に開催した「麻布・筑波リーダーズサミット」で行った、問題解決型のロールプレイングゲームの SDGs 教育への応用について、発表を行いました。



2021年度国際交流プログラムにおける生徒のオンライン交流での活躍

1．本校の国際教育の特徴

本校における国際交流プログラムの目標は、中高６年間を通じて「トップリーダー形成の一助として、国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材の育成を図る」ことである。

この目標の下、本校の国際教育の特徴を上げるとすれば、以下のとおりである：本校はスーパー・サイエンス・スクール（SSH）に指定されて第４期20年目であるが、このSSH事業の支援を受けた国際交流活動が本校の中心になる。その中で最大のものは、2009年より続いている、姉妹校の台中第一高級中学（以下、台中一中；なお、日本の高校に相当する）との研究交流である。SSHプログラムなので、理数系がテーマの研究文化交流という色合いが強いが、文系的内容でもしっかりしたものであれば排除するわけではない。とはいえ、全体としては理数系テーマの生徒が発表の中心になるため、文系生徒がより参加しやすい国際交流事業として、筑波大学からの予算補助を得て2013年に開始した釜山国際高校との文化交流プログラムもあり、この台中・釜山との派遣交流が本校の国際交流活動の２つの柱となっている（両校とはこちらからの派遣ばかりでなく、本校への訪問の受け入れも行っており、相互交流ということができる）。そこに、他のSSH校との連携で行っている国際交流プログラムが加わる。また、大学からの支援による、放課後のイングリッシュ･ルームも健在である。

ところが、今年度は昨年度に続き、コロナ禍が原因で現地に赴いての研究交流はことごとく中止となった。昨年度の経験の上にオンラインによる更なる交流に活路を見出し、出来得る限りのプログラムを実践した。今回はその報告である。

釜山国際高校とのオンライン交流（ズームによる文化交流。釜山国際高校の生徒とともに）

２．令和３年度活動報告

本校の国際交流プログラムは前述のように、本校単独で企画・実施する、台中一中及び釜山国際高校との交流事業と、他の SSH 校の企画に、本校の生徒・引率教員が参加する２つの形態に分かれる。以下に、まず本校の企画を述べ、その後他の SSH 校との企画について述べる。

（1）台中第一高級中学　（台中一中）

昨年同様オンライン研究交流であるが、今年度違うのは、事前に「三宅島フィールドワーク」が入ったことで、これは海外に行けないのでせめて国内での研修を行おうという意図から計画したものであった。実際に「三宅島研修」とのタイアップが決まると、昨年よりも参加希望者が多くなり、高２・８名、高１・５名という構成である。

①　三宅島研修から台中一中との研究交流までの流れ

三宅島研修となった理由の１つはアドバイザーとして：筑波大学の上條隆志教授がおり、現地に研究施設があるということであった。計画は以下の通り：

・10 月上旬：三宅島 FW 事前学習１
・10 月中旬：三宅島 FW 事前学習２
・11 月３日（火）夜出発～ 11 月６日（金）夜帰着 三宅島 FW
・11 月下旬：研究発表アブストラクト（Abstract）・学校紹介提出
　→１発表につき１点、pdf ファイル２ページ（書式自由）形式で（昨年度冊子参照）
・期末考査後（12/11（土）：プレゼンテーション・リハーサル
・12/17（金）：オンライン台中一中研究交流会
　→台中の都合で、研究交流会は１月７日（金）に変更。

②　オンライン研究交流当日

今年度は、図書室から電子黒板に提示しながらプレゼンを行った。時程は以下の通り：

１　The date: January 7（Fri）　１月７日（金）
２　The schedule（Japan Time）　*以下、TK= 筑駒、TC= 台中一中
　９：00-９：10 Opening Ceremony（開会式および学校紹介など文化交流～ 10：00）
　９：10-10：00 School Introduction & Cultural Exchange（25min x2：TK → TC））
　10：00-10：05 Short Break（休憩）
　10：05-11：05 first section of research study presentations（研究発表１）
　　（15min x4：TK → TC → TK → TC）
　11：05-11：10 Short Break（休憩）
　11：10-12：10 Second section of research study presentations（研究発表２）
　　（15min x4：TK → TC → TK → TC）
　12：10-12：15 Short Break（休憩）
　12：15-13：15 Third section of research study presentations　（研究発表３）
　　（15min x4：TK → TC → TK → TC）
　13：15-13：25 Q & A time（質疑応答）→今回はかなり活発にやり取りあり
　13：25-13：40 Ending remarks（7min x2）（閉会の辞）

本校の高１生は School Introduction & Introduction of Miyakejima Island を行った。

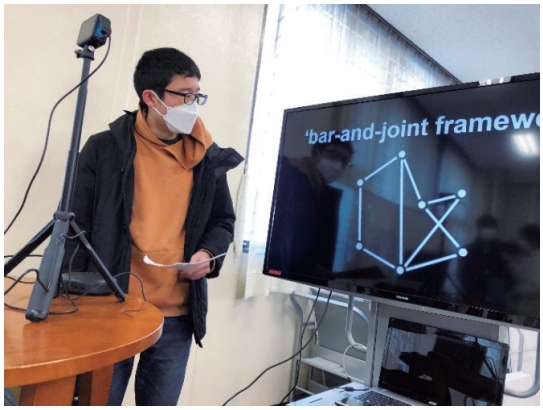
高２生の発表タイトルは以下の通り：

１　Combinatorial Game Theory and Tree Nim
２　The Rigidity Theory
３　Quadcopter with Arduino flight controller
４　New Sound Effector using Microcomputer

5　Fabrication of a walking robot using esp32
6　LED Glow Poi, made with M 5 stickCplus

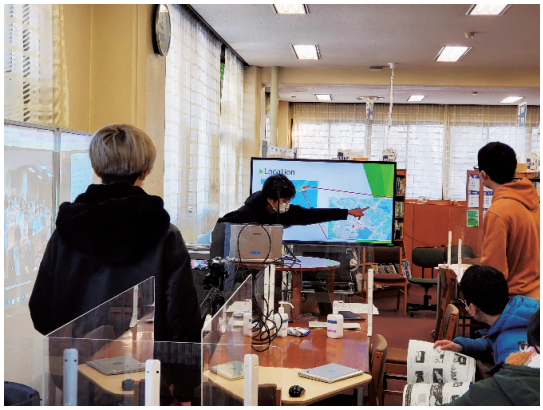
今年度は１、２が数学、３以降は物理系の発表であるが、理論というよりドローンやロボット、LED といったモノづくり的な発表で、専門でない聴衆にも楽しめるプレゼンとなった。

プレゼン会場の模様（右にプレゼン用電子黒板）



数学も図示化してプレゼン

歩行ロボットのプレゼン


本校の位置を説明する

◎参加生徒の感想（得たものは何か）は以下の通り：

・今回の発表会では、しっかり準備をして英語でプレゼンするという経験が初めてだったので、最初はなかなかうまく発表できませんでしたが、何度も練習を重ねることで聴きやすくわかりやすいプレゼンというものがどういうものなのかが少しずつわかってきて、本番は自分の納得のいく発表ができ、よかったです。また、台中一中の人の研究がとても高度なものばかりですごいと思いました。

・感染症の拡大により他校の生徒との交流がほとんど行えていない中、姉妹校である台中一中との研究交流会はとても刺激的なものだった。また、普段使っている言葉が違う人たちと英語を通してコミュニケーションが取れたのはとても印象に残った。他文化との交流はこれからも続けていってほしい。

・三宅島の合宿から今回の交流に至るまで３回の発表の機会においては、英語を話すことに不安があった分、どうやったら相手に伝わるかということを深く考えることができました。
相手方のプレゼンに関しては、前提知識の無さやリスニング能力が足りないことからほとんど聞き取ることが出来ませんでした。
英語力の向上だけでなく、人に物事をどう伝えるかということについて、今後も考えていきたいと思います。ありがとうございました。

・今回の研究交流会で、私は、台湾の生徒の英語の能力や研究のレベルの高さに改めて驚きました。残念ながら、自分にとっては具体的な内容を理解できたものはほとんどありませんでしたが、研究

の進め方や、発表のまとめ方などについて、新たな発見も多く、今後自分がこうした研究発表をする際の参考にできると感じました。自分の発表についてもいくつか反省点があり、これもまた次回以降に活かせればと思います。自分はこの交流会に２年参加しましたが、２回ともオンラインでの交流になってしまったのがとても残念です。来年以降は、台中一中の生徒と現地で交流できることを期待しています。

・今回の研究交流において僕が成長したと考えるところは、研究を片山君と一緒に自分達の力で行えたことである。今まで自分は完全に一から自分で考える研究は行ったことがなかったので、今回このような研究を行う機会があったことは、大学に進んでからも役立つ経験だと思う。良かったと思うところは、研究交流それ自体からは少し外れてしまうが、三宅島で満天の星空をみることができたことだ。僕は本当に宇宙のことが好きなので、今後も努力していくモチベーションに繋がったと思う。

・台中一中との研究交流会は、僕が筑駒へ入学した当初から参加してみたかった活動の一つでした。単なる文化交流ではなく、自身の研究内容を海外に向けて発表するこのような機会は、他ではなかなか得られない貴重な経験であると考えたからです。事実、今回の研究交流会を通じて僕は様々な学びを得ることができました。交流会という明確な目標があったからこそ高いモチベーションを持って自分の研究により打ち込むことができた他、英語、しかもオンラインという慣れない制約のもので如何にして的確に研究内容を発表する術をも得ることができました。また、本交流会後に生徒間で自主的に行ったSNSでの交流では、学校の様子や日常生活などを語り合い、自身の知見をより深めることができたと思います。

このような貴重な機会を提供してくださった教員の方々、そして台中一中の皆様、ありがとうございました！　我特別感謝實現了這次研究交流會的所有人們！

◎考察

感想の中に「感染症の拡大により他校の生徒との交流がほとんど行えていない中、姉妹校である台中一中との研究交流会はとても刺激的なものだった」というものがあった。一方で「自分はこの交流会に２年参加しましたが、２回ともオンラインでの交流になってしまったのがとても残念です。」という正直な感想もある。理想は、今回のようなオンラインを補助的に用いながら現地交流を行うことであろう。台中一中との交流が入学当初からの夢であったという生徒もいる。いろいろ試行錯誤しながら、さらに良いプログラムにしていくことが必要であろう。

今年度の台中一中とのオンライン交流参加生徒及びスタッフ

（2）韓国・釜山国際高校（Busan International High School（BIHS））

本校の国際交流事業のもう一つの柱であり、主に文系向けのプログラムとして、筑波大学からの教育長裁量経費による支援を受け、2013年より続いている。基本的に、釜山国際高校から本校訪問が１月に行われ、３月末に、本校生徒が釜山国際高校を訪問する、という相互交流を行っている。ただ、昨年度はコロナ禍のため、現地交流はできず、またオンライン交流も実施することができなかった。

そこで、今年度は早くからオンライン交流の可能性を探るべく、それぞれの学校の年間の学校暦を比較し、どの時期であれば、オンライン交流が可能かを検討した。その結果として、１学期期末考査後の週は両校とも比較的自由が利くことがわかり、５月の連休明けから、高１、高２への参加を呼び掛けたところ、５月末までに高２・12名、高１・３名が希望を申し出た。先方の担当者と連絡を取り合い、以下のようなプログラムを組んだ。

◎釜山国際高校とのオンライン交流１
期日：７月12日　13：30-14：20、14：30-15：20　（BIHS日本語専攻・高１の２クラス）
形式：Zoomによるオンライン交流。
　→50分授業を３分割
・初めの15分を各校のグループ発表、
・次の30分をbreakout roomによるグループ交流
・最後の５分を各グループの報告
　→２クラスで同様の展開をする。

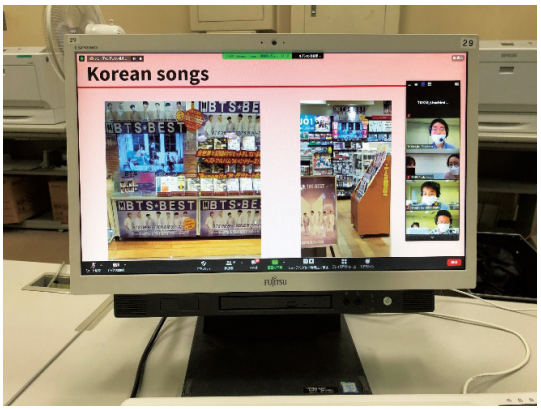
なお、50分内でお互いを知りあうことは非常に困難なため、事前に自己紹介シートとして〈Name / hobby / what I'm interested in Korea / brief profile〉のテンプレートを記入させ、BIHSでも同様の自己紹介シートを用意してもらい、お互いにグループ交流での参加者の趣味などがわかる状態にした。

その後、高１はコロナ禍で延期していた校外学習を７月の第２週に実施することになり、オンライン交流は高２のみの参加となった。

① 本番までの流れ
・高２生徒12名を２班に分け、それぞれ発表。
　１班：日本国内のコリアタウン・文化
　２班：筑駒学校紹介
・釜山国際に参加生徒のプロフィール送る。（５月下旬）
・釜山生徒（21名X2クラス）のプロフィール届く。（６月上旬）
・釜山国際の担当者Hwajinさんと八宮、阪田先生とでZoom会議（6/15）→本番当日の時程を確認。

② 本番当日
TKKM 12名（Senior 2）、BIHS21名（Senior 1）x2 classes　（TKKM@Computer Space）（釜山国際高校 はオンライン授業で各家庭から）
13：30　Greetings（挨拶）
Group presentations（グループ発表）　TKKM, BIHS 各６分　　（両校学校紹介）
13：45　Discussion on the breakout room（ブレイクアウト・ルーム）
（TKKM 2 + BIHS 4）x5 groups　（30分）
* talk over the topics of the group presentations
or talk over a photo of favorite things
（グループ発表のテーマに沿って、または好きなものの写真などを用意して、それを説明しあう）
14：15　Closing address（授業参加に対する感謝）
14：20（５限終了）

コンピュータ・スペースでの様子



本校生徒のオンライン発表

６時間目も、同様の時程で行った。

先方の授業にお邪魔して交流するというのは、時間が限られており慌ただしかったが、それでも初の試みで大きな成功を得た。参加生徒が今回の体験で得たものの回答は以下の通り：

・海外の人と英語を使ってコミュニケーションをする力
・新たな交友関係、会話英語のスキル（文法よりもノリと勢い、もちろんボディランゲージも）
・プレゼン力、英語力
・海外の友人、異文化への興味（メールで BIHS の友達と日本や韓国の飲み物や気候について質問しあったり、SNS で交流したりしています）などなど。もちろん、プレゼン力（英語、日本語問わず総合的に）や語学力もついたと思う。
・学んだ英語を実践で使う機会 友達
・英語での発表の質が改善した。また、一年ほど韓国語を勉強するうちに、韓国人の友達が欲しかったところだったので、４人も連絡先を交換することができ満足している。
・プレゼンのやり方、韓国の同年代の子と知り合えたこと
・英語のスピーキング、リスニングともにもっと頑張らなければいけないという刺激を受けることができた。

◎釜山国際高校とのオンライン交流２

１学期の交流が好評で、BIHS でも２学期末に同様の交流を行う方向で同意してくれた。そこで、今回は参加者を高１に絞って、12 月の期末考査後に実施することにした。実際には 10 月の段階でも、生徒の反応は鈍く５、６名の希望者であった。そこで文化祭後に再度呼びかけ、８名の希望者を得た。

期日：12 月 20 日（月）
　　10：40-11：30、11：40-12：30（３、４時間目）
　　高２日本語クラス（３時間目 17 名、４時間目 18 名）
形式：両校で学校紹介など（８～ 10 分 x2)、
　　ブレイクアウト・ルームで個々に交流
　　(本校生徒１名、釜山生徒２～３名）x8 グループ
　　(25 分程度)
　　まとめ（５分)：各グループの様子を短くレポート

基本的に１学期同様のプログラムであるが、今回は参加者が少ないので、ブレイクアウト・ルームでのグループ構成は、本校生徒が１名対 BIHS ２、３名であった。

また、今回は先方は高２生徒ということで、より積極性もあり、２クラスとも大いに盛り上がった。２クラス目の最後に、集合写真をスクリーンショットで撮ったので掲載する（本稿、扉の写真)。

本校の水田についてプレゼン

ズームによる交流

◎生徒の感想

（高校２年生）

・英語での発表の質が改善した。また、一年ほど韓国語を勉強するうちに、韓国人の友達が欲しかったところだったので、４人も連絡先を交換することができ満足している。

・政治などに踏み込んだ会話はしていないため断定はできないが、所謂反日的思想を有する人は若い年代では少ないのではないかと思った。

・新たな交友関係、会話英語のスキル（文法よりもノリと勢い、もちろんボディランゲージも）。

・海外の友人、異文化への興味（メールで BIHS の友達と日本や韓国の飲み物や気候について質問しあったり、SNS で交流したりしています）などなど．もちろん、プレゼン力（英語、日本語問わず総合的に）や語学力もついたと思う。

（高校１年生）

・パワポを使う機会を設けてもらったことで、普段はしない経験になった。

・韓国の知り合い？　英語での会話の経験。

・スライド作成などの技術、見やすさ聞きやすさなど相手への配慮、チームで動くときのコミュニケーション、異文化・異言語理解、英会話力、コミュニケーション能力

◎考察

この２年間、釜山国際高校と現地での交流はなく昨年度はオンライン交流すらなかった。今年度は、何とかその機会を作り、１度目がうまく行ったので２度目も実施することになり全体として、有意義な交流を持つことができたと言える。わずか２時間足らずの交流でも、Zoom のブレイク・アウトルームの活用で、対面して１対１で話せたという経験は、予想以上の刺激になったようである。現地での交流が再開した後でも、オンライン交流を補助的に活用して、国際交流をさらに有意義なものにしたいと思う。

３．まとめ

以上、本校の国際交流の実践を紹介した。例年の本校の国際交流の特徴は、事前準備に相当時間をかけていることであったが、今年度もコロナ禍で、その準備もなかなか危ぶまれた。しかし、昨年度のオンライン交流の経験を踏まえ、さらに一歩進めつつ新しい媒体での研究交流の可能性を広げることができた。例年通りではないが、例年とは違った体験を通じて学びがあったことも事実である。特に、釜山国際高校との交流例のように、学校対学校というのでなく、具体的な授業にオンライン参加するというのは、小回りが利き、比較的手軽に実施できる点で大きな発見であった。来年度も、まずできるところから可能性を探り、生徒の心を刺激するようなプログラムを作りたいと思う。

（文責：研究部・国際交流担当　八宮孝夫）

附属坂戸高等学校

WWL 最終年度を終えて

1．本校の国際教育の特徴

附属坂戸高等学校（以下「本校」）では平成 20 年に校内の国際教育推進委員会（Committee of International Studies、以下「CIS」）を設置し、それ以来本校独自の取り組みである「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」、ブラジル、タイ、カナダ、台湾、インドネシアなど各国からの留学生の受け入れ、ユネスコスクールへの加盟、学校設定教科「国際」及びその科目の設置、及び本校が主催する「高校生国際 ESD シンポジウム」などを通して、総合学科高校だからこそ可能である多角的な国際教育のあり方を模索しながら実践を積み重ねてきた。そして、これまでの本校の実践の成果をベースとして、平成 26 年から 5 年間、文部科学省のスーパーグローバルハイスクールとして、「グローバル社会において、自分自身は社会とどのようにかかわり、平和で持続可能な社会を実現するために何ができるか」を生徒自身が考え、実践できることを重視した課題研究プログラムを展開してきた。

1946 年に地元の農業高校として発足してから 75 年、1994 年からは日本初発の総合学科高校のパイオニアとして 20 年以上歩みを重ね、平成 26 年度の SGH 指定後は、総合学科を生かしたグローバル社会におけるキャリア教育の実践を積み重ねている。2018 年 4 月には、国際バカロレア日本語 DP の 1 期生が入学した。今年度は 2 期生が最終試験を受験し、今年度も世界平均を上回るスコアを獲得している。

本年度もコロナ禍で WWL（ワールドワイドラーニング）コンソーシアム構築支援事業の拠点校として、何ができるか試行錯誤しながら走ってきた 1 年となった。チャレンジングな状況においても、これまでの連携先からの変わらぬ支援や新たな連携先からの支援をいただき、新たな取り組みにもチャレンジすることができた。本報告では、WWL 事業について拠点校の視点からまとめるとともに、本年度新たに実施した ASEAN 校外学習の代替措置（国内校外学習）及び The 3rd SDGs Global Engagement Conference online を中心に報告する。

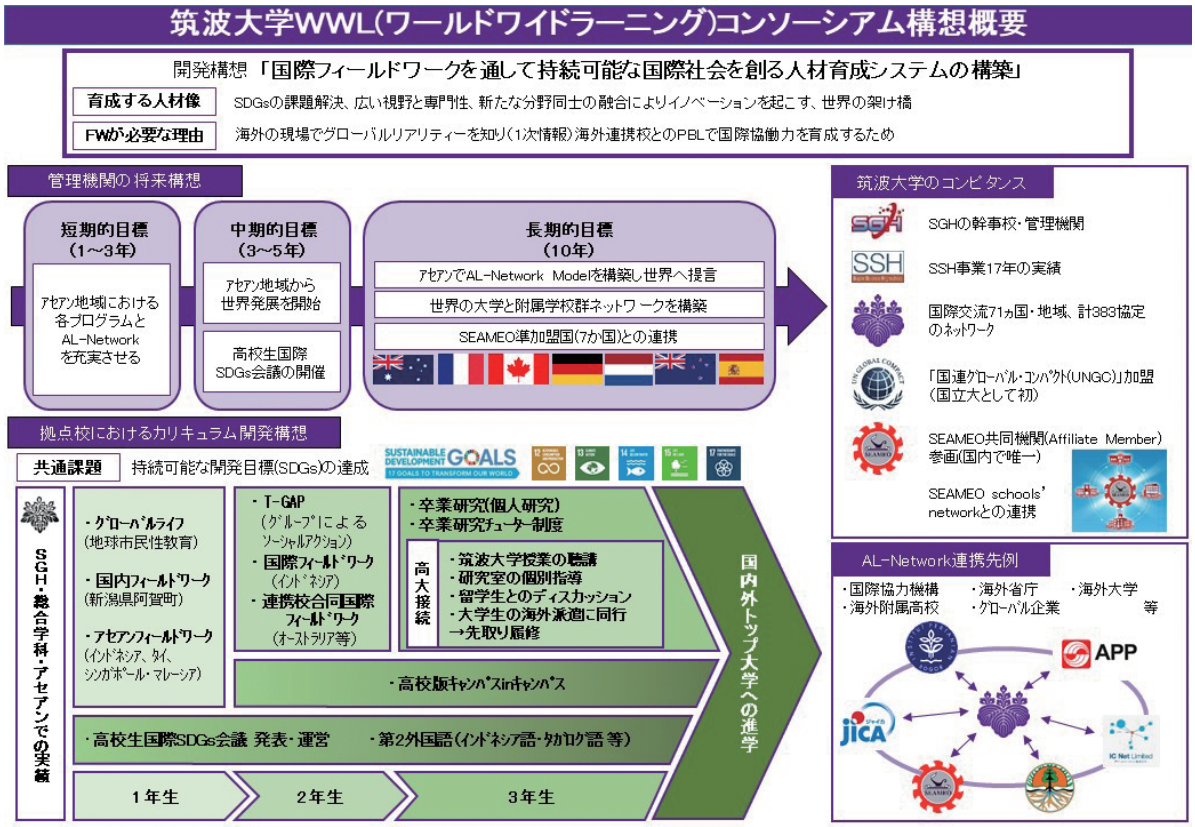
（ASEAN 校外学習の代替措置：国内校外学習＠長崎方面　2021 年 7 月実施）

2．2021 年度の WWL 事業について（拠点校の視点から）

WWL 事業は、SGH 事業の後継事業に位置付けられている。これまでの SGH 事業と大きく異なる点は、学校を指定するのではなく、管理機関を指定し、そこに拠点校、そしてコンソーシアムを組成することによりさらに共同実施校、連携校を置くことである。WWL 事業で各コンソーシアムにおいて求められている主な開発単位として、1）グローバル人材育成のためのカリキュラム開発（社会課題を掲げた PBL）、2）高校生が主体となった国際会議の開催、3）高大接続による高度な学習機会の提供、4）教師教育等があげられている。

1）については、ASEAN 校外学習及び「国際フィールドワーク」が中止に追い込まれたが、2021 年 7 月に代替措置として「国内校外学習」を企画・実施することができた。2）については、初めての試みとして SEAMEO（東南アジア教育大臣機構）を通じて広報した。その結果、東南アジア諸国から約 200 校が参加し、真に国際的なシンポジウムとして変貌しつつある。3）については、高大連携科目である「国際演習」が中止になった。4）の教師教育は、昨年度受け入れた、SEAMEO のプログラムである「SEA-Teacher プログラム」は中止となったが、あらたにオンラインによる教育実習も模索されている。東南アジアの大学生を教育実習生として受け入れたが、熱心に教育実習に取り組み、本校生徒・教員にもポジティブなインパクトを与えてくれたプログラムだった。今年度は実施されなかったが、来年度以降の展開を期待したい。

コロナ禍によって大打撃を受けた WWL 研究開発事業であるが、ステイクホルダーの皆様からの協力のおかげで、スムーズに代替措置を作り上げることができた。特に、ASEAN 校外学習の代替措置である「国内校外学習」は、急な案件であるにも関わらず、企業・受け入れ先自治体の協力のおかげで、実現までこぎ着けた。SGH 指定以来、日頃から課題研究活動のパートナーとのネットワーキングが WWL 研究開発においても功を奏したと思われる。



（研究開発の構想図）

３．The 3rd SDGs Global Engagement Conference On line version について

2012 年度から本校では、高校生国際 ESD シンポジウムを開催しており今年で 10 回目となった。SGH 指定期間中は、これとあわせて全国 SGH 校生徒成果発表会を実施していたが、WWL 指定後から、The SDGs Global Engagement Conference Tokyo とし、WWL で掲げている SDGs に関する国際会議として開催している。

今年度の ESD シンポジウムは、WWL のネットワークを最大限に生かし、質的・量的な拡大を目指した。本学附属学校からは、小学校、中学校、高等学校、駒場高等学校、桐ヶ丘特別支援学校、及び視覚特別支援学校の生徒・教職員が参加した。また、国内連携校からは東京学芸大学附属国際中等教育学校の生徒が課題研究活動についてプレゼンした。国内参加校のプレゼンはいずれも質が高く、参加者にインスピレーションを与えることができた。

加えて、海外参加校も劇的に増加した。その背景は、本校が SEAMEO（東南アジア教育大臣機構）に加盟することができ、SEAMEO School Network を通じて本シンポジウムへの参加を呼びかけたことである。その結果、465 件の問い合わせをいただき、約 200 校の高校及び大学から生徒・教職員が参加した。英語セッションの参加者は大幅に増加し、本シンポジウムを東南アジア諸国の高等学校に広める機会になったと思われる。

これまでのネットワーク、新たなネットワーク、オンラインの利点、対面の利点などを整理しながら、来年度、11 回目を迎えるシンポジウムの在り方を検討したい。

本年度のシンポジウムのプログラム

Program

(Starts at 9:50)

Opening Address

Dr. Chieko MIZOUE

(Vice President, University of Tsukuba)

****

Opening Session

Hanano SUZUKI, Isora YAMAZAKI

(Senior High School at Sakado, University of Tsukuba)

Keynote Speech

Dr. Masahisa SATO

(Professor, Graduate School of Environmental and Information Studies, Tokyo City University)

****

Section Meeting (10:45-12:00)

Section Number	Title
Room A	Ethical Consumption Workshop (Japanese)
Room B	Think Soybeans, Act SDGs! Workshop (English)
Room C	Oral presentations in English
Room D	Oral presentations in English
Room E	COVID-19: Its Impacts and Beyond Workshop (English)
Room F	Oral presentations in Japanese
Room G	Oral presentations in Japanese
Room I	Special session (Agriculture and Sustainability) (Japanese)
Room J	Special session for junior high students (Japanese)
Room K	Special session for 1D students (Japanese)

****

Starts at 12:15

Review

Dr. Nakao NOMURA

(Associate Professor, University of Tsukuba)

Closing Session

Hanano SUZUKI, Isora YAMAZAKI

(Senior High School at Sakado, University of Tsukuba)

(Ends at 12:30)

４．国内校外学習について（ASEAN 校外学習の代替措置）

WWL の研究開発構想は「国際フィールドワークを通じて持続可能な国際社会を作る人材育成システムの構築」である。生徒がフィールドワークを行い、一次情報を獲得することで、課題研究活動の質を高めるカリキュラムのあり方を検討し、実施してきた。その中核をなす「ASEAN 校外学習」が COVID-19 のせいで中止に追い込まれたが、急きょミッションを変えずに国内版の校外学習を開発し、実施した。感染対策上、密集を避けるために４方面からの選択制とした。

（１）期間：2021 年７月 14 日（水）～ 2021 年７月 17 日（土）

＊長崎方面のみ 2021 年７月 16 日（金）まで。

（２）対象学年：第二学年全員

（３）方面

旅行会社	アイ・シー・ネット＆ HIS		JTB	
行先	長崎県西海市	静岡県掛川市	長野県飯田市	山梨県笛吹市
テーマ	地域資源の発掘、民泊を活用した地域創生について。	お茶を活用したビジネスモデルの提案と地域活性化について。	ポストコロナの観光のあり方と農業の六次産業化について。	笛吹市の魅力を発掘し、新たな学校旅行を提案する。

（山梨：地域おこし協力隊の方が経営するショップにて）

（長野：六次産業化に取り組む農家にて）

（長崎：西海市の民泊家庭の皆様と）

（静岡：地域活性に取り組むお茶農家にて）

例として山梨県笛吹市コースを紹介する。山梨県は COVID-19 の感染者が比較的少ないことから、学校旅行の受け入れが増加した。しかしながら、笛吹市（石和温泉）は学校旅行を受け入れた経験が少ないため、本校生徒がフィールドワークを行い、笛吹市を舞台にした学校旅行のプランを笛吹市役所に提案するという校外学習を開発した。

生徒はグループで事前学習に取り組み、学校旅行のコンセプトを作り、そのコンセプトに合う訪問先をリサーチしてフィールドワークに臨んだ。そして、最終日にその成果を笛吹市役所の職員にプレゼンし、フィードバックを得ることができた。

５．上記以外のおもな国際教育活動例一覧

・国際連携協定校ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校とのオンライン交流会（2021 年５月） １年生全員とコルニタ高校の１年生全員がオンラインでつながり、交流会を実施した。入学したばかりの１年生に姉妹校のことを紹介するキックオフイベントとして開催した。
・WWL 連携企業アイ・シー・ネット株式会社との連携によるコロナ禍におけるオンライン授業の開発（2021 年９月～ 11 月） １年Ｄ組（SG クラス）向けの特別授業を連携企業であるアイ・シー・ネット株式会社と共に開発した。COVID-19 による社会の変容に焦点を絞り、タイやフィリピンの企業にインタビューし、その成果を ESD シンポジウムで発表した。
・WWL 連携企業 APPJ 社及び一般社団法人日本エシカル推進協議会による、エシカル認証商品の開発に関するワークショップの開催（2021 年 11 月） 2021 年 11 月の ESD シンポジウムにて、エシカル消費及びエシカル認証商品に関するワークショップを開催した。実際の商品を手に取りながら、商品のエシカル化をどう図っていくか、議論した。
・アジア学院による Servant leadership に関するワークショップの開催（2021 年 12 月） 学校法人アジア学院は、WWL 事業の一環として訪問したフィールドワークの受け入れ先である。2020 年 11 月の訪問以来、本校生徒の課題研究活動を支援してもらっている。今年度は、アジア学院が掲げるサーバントリーダーシップについてワークショップを開催してもらった。

６．生徒の変容について

SGH および WWL では、生徒の長期的な変容の把握が求められている。現在、「国際フィールドワーク」参加者については、卒業後の質的な変容を継続的に調査している。今後は、その調査結果を踏まえ、新たな教育課程の開発に挑戦することが求められるだろう。

一方、短期的に見ると、生徒主催の学校行事が増加している。たとえば、アジア学院フィールドワークの参加者が、フィールドワークでの学びを積極的に広報し、今年度のサーバントリーダーシップのワークショップ開催にこぎ着けた。ラーニングネットワークを生かした学びが、生徒を通じて更なる広まりを見せつつある。今後も生徒主催の学校行事が増えることを期待している。

また、海外大学への進学を希望する生徒が、毎年数名ではあるが出始めている。WWL 及び IB 導入の成果だと言うことができるだろう。さらに、コロナ禍ではあるが、今年度１名の生徒が米国の高校に留学した。生徒のグローバル志向は継続しており、その期待に応えていくことが本校の使命である。

（文責：吉田賢一）

グローバル社会で活躍する視覚障害当事者の育成を目指して

１．本校の国際教育の特徴

2021 年度の本校における国際教育については、COVID-19 感染拡大の影響もあり、十分には実施できなかったが、オンライン会議システムを用いた活動も取り入れ、ある程度の成果を上げることができた。中でも、高等部生徒有志が参加したタイ視覚障害者支援クリスチャン財団傘下の学校に通う視覚障害生徒とのオンライン交流は、昨年度からステップアップし、より深い内容にすることができ、参加した各学校や生徒にとって、意義のあるものとなった。2022 年度も引き続き生徒の交流を継続し、教員間の交流についても検討していきたい。

本紙では、高等部におけるタイとの交流の他、トビタテ！留学 JAPAN への取り組み、本校専攻科鍼灸手技療法科への留学生と小学部児童との交流、中学部における異文化理解の取り組み、本校在校生および卒業生のパラリンピック出場選手による本校児童・生徒への東京 2020 パラリンピック報告会等について紹介する。残念ながら感染拡大のため、具体的な活動はできていないため今回は紹介できないが、専攻科鍼灸手技療法科では例年通り、インド共和国における日本式手技療法教育モデル校卒業生に対する修了証の発行（教育局）を行った。

2022 年度も感染症への対策のため十分な活動はできないと思われるが、上記の活動を継続・発展させながら、視覚特別支援学校のナショナルセンターとして、また視覚障害教育専門機関としての国際的な役割を担うセンターとして、そしてグローバル社会で活躍する視覚障害当事者の育成を目指し、国際教育活動を推進していきたい。

（文責：青松利明）

２．高等部　タイとのオンラインによる交流会について

本校は、2020 年にタイ視覚障害者支援クリスチャン財団（以下、CFBT）及び管理下の盲学校と国際交流協定を締結して以来、高等部では定期的にオンラインによる生徒同士の交流会を行っている。本年度も、日本とタイの視覚障害教育の共通点や違いについて学ぶこと、異文化を学ぶことで国際感覚を身につける機会とすること等を目的に実施した。具体的には、「インクルーシブ教育」「ICT」「異文化」の３つの班に分け、日本とタイの混成グループを作り、交流会及び SNS を通じて生徒同士で意見交換を行った。

CFBT からは Khon Kaen School for the Blind（コンケン盲学校）、Nakorn Ratchasima（ナコーンラーチャシーマー盲学校）、Khon Kaen Vocational College for the Blind（コンケン職業訓練校）から２名ずつ計６名の生徒が、本校からは高等部２年生６名、１年生５名の計 11 名が参加した。

各班での活動において、生徒たちは日本語及びタイ語は使用せず、英語のみで会話をした。お互い母国語ではない言語に多少なりとも苦慮しながら、自分たちの伝えたい内容や思いを様々な形で伝えることができた。また全体会では、本校卒業生の堀内佳美氏、CFBT からは Rosarywan Charnsilp 氏に日本語・タイ語の通訳をお願いし、交流会をサポートいただいた。

以下は、本交流に参加した本校生徒の感想の一部である。（　　）内は生徒の学年と氏名をイニシャルで示す。

①普段英語を授業で学んでいるが、実際にアクティブな英語を使うことはほとんどなかったため、互いの文化や情報を交換しながら英語も使うことのできるこの交流会は、個人的に成長できた部分が多くあったと感じる。（高２K.K.）

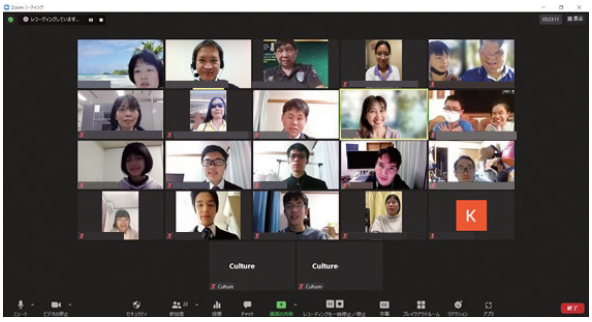
②タイの食文化と日本の食文化の共通点や相違点を知り、新しく知ったことが多くあった。タイの食事だけではなく挨拶の文化を知ることができた。タイの挨拶は（挨拶する）相手によって異なって

いるということで、日本の敬語に少し似ていると感じた。ディスカッションでは他言語でのコミュニケーションの難しさを感じた。（高１Y.K.）

③私は、今回の交流会で貴重な経験ができた。お互いに第二外国語である英語を使って、オンラインやSNSでコミュニケーションを取ることができたからである。そして、日本とタイの異なるインクルーシブ教育というテーマで話ができ、今までに経験のない形でコミュニケーションができたのは、今後の活動にプラスになった。（高２A.S.）

④お互い第二外国語である英語を使い、少しずつではあるが、英語でのコミュニケーションが取れるようになった。また、ブレイクアウトでの交流の時には通訳なしでの会話ということで、最初は緊張して上手くいかないこともあったが、だんだんと互いの文化を共有でき、勉強になった。（高２S.T.）

（写真１）発表の様子（ICT班）



（写真２）オンライン交流会　集合写真

（文責：佐藤北斗）

３．トビタテ！留学JAPAN　タイ留学について

高等部では、トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム（以下、トビタテ）の制度を活用し、2016年度（第２期）より継続的に生徒の短期留学を果たしている。2021年度（第７期）は５名の生徒が合格し、留学に向けての準備を進めている。本来であれば、2022年１月に渡航の予定だったが、外務省「海外安全ページ」の危険情報及び感染症危険情報「危険度レベル１」以下が海外渡航の条件であるため、留学時期の延長制度により、2023年２月に時期の変更をしている。

本年度も継続してトビタテに合格できたのは、先輩のトビタテ生（今回はトビタテ５期生が中心）が後輩のトビタテ生に受験に向けて多くのサポートしてくれたことにある。メールでの１次選考の書類の書き方についてのアドバイスや、２次選考の面接試験において短い時間でどう説得力のある表現ができるのかなど、多くの支えが合格に結びついた。また本年度のメンバーだけで面接のシミュレーションを行い、受験者役、面接官役に分かれお互いに良い点や改善点を伝え合うことを通じて、自身の課題点が見え、また自分自身の自信につながっている様子だった。

また、本年度は全国のトビタテ７期生対象の事前研修会において、トビタテ留学への思いや意気込みを表現するオープニングムービーに本校の生徒がトビタテの代表として選ばれた。タイにおけるインクルーシブ教育と日本との違いを、実際にインクルーシブ教育校に通って十分に学び、将来の夢に向けて進みたいという強い思いを語っていた。

トビタテ留学への思いを語る本校生徒

（文責：佐藤北斗）

４．小学部５年生と鍼灸手技療法科留学生の交流会

2021 年 12 月 6 日（月）６時間目に交流会を行いました。中国、キルギスの２か国の方からそれぞれの国の面積や人口、国民性、食べもの、学校教育などの話を聞いたり、帽子や鞭、住んでいる建物の模型などを触らせていただいたりしました。その後、グループに分かれて簡単なゲームを楽しんだり、１から 10 までの数え方を教わったり、子どもたちからの質問に答えていただいたりして、楽しく充実した時間はあっという間に過ぎていきました。子どもたちは、下校前に、今日知った中国やキルギスのことを家族にクイズにして出したい、と張り切っていました。今後、校内で出会った時にも、声をかけあって交流が深められるとよいと思います。とても貴重な異文化体験の時間となりました。

（文責：小西明子）

５．中学部国際教育

中学部では、今年度から１・２年生では「総合的な学習の時間」にイングリッシュルーム活動を実施し、国際教育の強化を図った。コロナ禍で放課後の活動が制限され、ほとんどイングリッシュルームを実施できなかった昨年度の反省に基づいての変更であった。また、授業時間内に実施することで、全員の参加が可能になった。

講師は、ニュージーランド出身の日本で長く暮らした経験のある方にお願いした。講師の方は日本のこともある程度知っている方だったので、日本のことをどのように英語で表現するのかを生徒が学べたのが収穫だった。また、１年生にとっては、英語の教科書でニュージーランドのことが扱われていることから、親しみを持ちながらニュージーランドの生活や文化を深く知る機会となった。通常の授業と国際教育をリンクさせることで、生徒の興味や関心を高めることができる事例として、今後も継続していきたい。

コロナ禍で校外学習が縮小されているが、今後は社会見学に大使館訪問を取り入れたり、外国の方を校内に呼んで講演していただいたりと、中学部としての国際教育をますます充実させていきたい。

（文責：片山　翔）

６．東京 2020 パラリンピック競技大会を核とした本校におけるオリンピック・パラリンピック教育の取り組み

COVID-19 の世界的流行を受け、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会の開催が１年延期され、2021 年がオリンピック・パラリンピックイヤーとなりました。2021 年度のオリンピック・パラリンピック教育（以下オリパラ教育）は、東京 2020 パラリンピック競技大会（以下東京パラリンピック）を核に据え、在校児童生徒たちの未来をより良くしていくための取り組みを実施しました。

本校高等部普通科３年の園部優月くんは５人制サッカー日本代表として全試合に出場し、初のパラリンピックの舞台で、対戦した選手たちとしのぎを削り、世界基準の技術や戦術、相手を上回ろうとする気迫を、試合での経験や会場の雰囲気などから感じ取って学校に帰ってきてくれました。

東京パラリンピック閉幕後、大会に出場した在校生・卒業生 16 名のうち、９名の選手にご協力をいただき、本校を会場に報告会を実施しました。児童生徒たちは選手の皆さんの言葉の一つひとつに耳を傾け、自分自身の力に変えていこうとする姿がありました。

その他、体育実技や理論の中でパラリンピック競技でもあるゴールボールやブラインドサッカー、陸上競技や水泳などのスポーツに親しむことやオリンピック・パラリンピックの歴史や文化を学ぶことで、生徒たちのより良い心身の発育発達に繋げています。

今後も多数のパラリンピアンを輩出してきた（していく）学校としての責務を感じながら、世界の舞台で活躍する貴重な人材を活用し、在校生の成長を後押しするオリパラ教育の充実と推進を実践していきます。

園部くんと出場を記念した横断幕

東京パラリンピック報告会の様子

東京パラリンピック報告会にて（高等部生徒）

多様な国際交流

◆フランス語・英語・日本語、フランス手話、日本の手話を用いた多言語交流

◆絵画やデザイン、工芸の作品交流

１．本校の国際教育の特徴

筑波大学附属聴覚特別支援学校（以下、「本校」）における国際教育推進事業の目的は、海外の聾学校（フランス・韓国・台湾）との生徒相互訪問交流、オンライン交流、海外企業との連携、海外からの来校者を積極的に受け入れることを通し、国際的資質を育て、これからの国際社会に通用するグローバル人材の育成を目指している。また、卒業後、本校生徒が国際教育推進事業の経験を活かして広い視野に立ち、社会で活躍していくことを期待している。

２．高等部普通科パリ聾学校とのオンライン交流

フランス国立パリ聾学校（Institut National de Jeunes Sourds de Paris：以下、「パリ聾学校」）との交流は、平成 15 年の姉妹校協定の締結から始まり、オンライン交流は平成 25 年度より行っている。平成 25 年度のオンライン交流は、本校からパリ聾学校への最初の訪問時に、本校寄宿舎との間で行われた。本校寄宿舎には高等部普通科の生徒も数多く在籍していたが、通学生はこの交流には参加できなかったため、平成 28 年度からは放課後の時間を利用してオンライン交流を行った。その結果、異文化理解やコミュニケーション能力の向上など、オンライン交流を活用した国際交流の効果が示唆された。令和３年度は、11 月以降にオンライン交流を２回実施した。事前に希望者を募ったところ、23 名が参加を希望し、そのうち第１回の交流では 23 名全員が参加した。第２回は生徒によって他の行事との重なりが生じたため、19 名の参加となった。フランスと日本の時差は８時間（冬時間）であるため、第１回、第２回ともに日本時間の 16：30（フランスは８：30）から、１時間程度交流を行った。以下、オンライン交流の様子や成果を報告する。

（1）事前準備

令和３年度のオンライン交流は、オンライン会議アプリ Zoom（以下、Zoom）を使用して、２学期に２回（11 月 19 日、12 月 17 日）実施した。２回とも、昨年度と同様の時期である。

第１回の交流は、母語の異なるパリ聾学校の生徒と初めてコミュニケーションをとることを考慮し、３回の事前学習を実施した。第２回の交流では、第１回の交流で発表しなかったグループが、前回の反省をもとにプレゼンテーションを作成し直し、発表、交流を行った。

高等部１年生７名、２年生 14 名、３年生２名と人数が多かったため、一人一人が公平に交流に参加できることを考慮し、「本校の文化祭」「日本の文化」「日本の映画・アニメ・音楽」「日本の世界遺産」の４つのワーキング・グループに分かれ、それぞれ異なるテーマで日本の紹介を行うこととした。３年生は令和元年 12 月にパリ聾学校の訪問交流に参加した生徒もいたため、アドバイスをしたり、交流が円滑に進むよう補助をしたりする立場として参加した。事前学習の中で、動画共有サービス YouTube を用いて、フランス手話の基本的な自己紹介や挨拶表現の動画を視聴し、練習をした。タブレット端末で使用する学習支援アプリ「ロイロノート・スクール」を用いて、グループでスライド資料を作成する際の注意事項等も確認した。

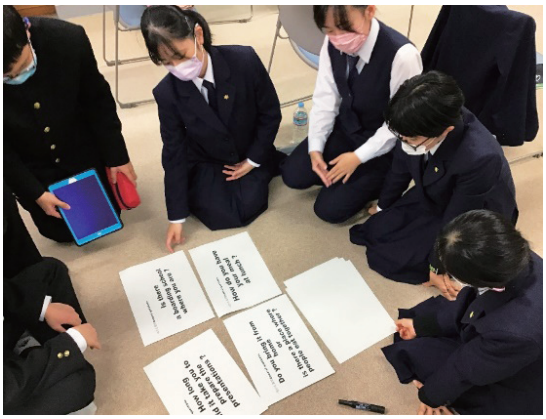
（２）活動報告

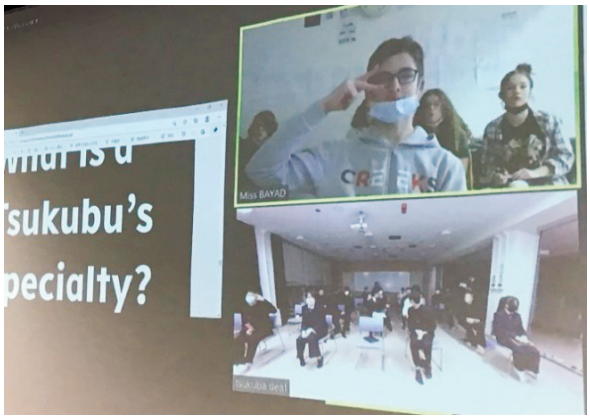
①オンライン交流（第１回 11 月 19 日、第２回 12 月９日）

オンライン交流は、参加者全員が集まれる多目的スペースで、常設されている大型のスクリーンとプロジェクターを使用して行った。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、本校教員、生徒は常時フェイスシールドを着用して行った。通信機器については、本校のコンピュータとパリ聾学校のタブレット端末をインターネットに接続して、Zoom のミーティング機能を使用した。本校のコンピュータは、１台は生徒が発表時に操作するために、もう１台は本校とパリ聾学校の教員同士がチャット機能を使用するために用意した。スクリーンには、①パリ聾学校の生徒の様子、②本校の話者の様子、③スライド資料、④教員のチャットを一度に確認できるように画面を分割して投影した。本校の撮影は、オーリングライトが一体化した Web カメラを使用し、生徒の表情や紙に書いた文字が相手に見やすいように配慮した。

第１回の交流では、はじめにお互いの国での挨拶や基本的な表現を教え合う活動を行った。文字で「Merci」「こんにちは」などと示した後で、生徒が手話表現で示し合った。次に、本校の生徒３グループが、「本校の文化祭」「日本の世界遺産」「日本の映画・アニメ・音楽」について、それぞれスライドを用いて発表を行った。本校生徒が英語で作成したスライド資料のデータを、事前にパリ聾学校の教員宛てにメールで送付し、生徒に読んでもらい、その内容についての質問を考えて返信してもらっていた。交流当日は、スライド資料に関するパリ聾学校の生徒からの質問への返答を中心に行うことで、より内容の深いやりとりに繋げることができた。「本校の文化祭」についての発表では、本校生徒が本校のゆるキャラの着ぐるみで登場して紹介する場面があった。パリ聾学校の生徒からは、英語で「ゆるキャラがどうして紫色なのか。何のために作ったのか。」という質問があり、本校の生徒が「紫色は学校のテーマカラーだから。」という旨の英文を紙に書いて答える様子などが見られた。質問を提示し、紙面を裏返して回答を見せるなど、生徒の伝え方に工夫が見られた。

第２回の交流の前に、パリ聾学校から事前に送付された学校紹介動画を視聴した。動画は５分程度のもので、リレー大会やダンスパーティ（プロム）など学校行事が紹介された。パリ聾学校の施設や学校生活の様子がイメージしやすい内容だった。交流では、はじめにパリ聾学校の学校紹介動画を視聴した。最寄り駅から学校までの登校風景が撮影されており、学校周辺の街並みを知ることができた。次に、本校生徒が「日本の文化」をテーマに、「桃太郎」などの昔話の紹介と、「５分前行動」に代表される日本人の時間に対する考え方の特徴について発表を行った。発表終了後には、英語で質問を考え、筆談で会話をした。本校生徒が「５分遅刻することをどう感じるか」と質問したのに対し、パリ聾学校の生徒が「５分は何とも思わない。電車だって遅れるから」という旨の回答をするなど、お互いの時間に対する意識の違いを英語で楽しみながら共有することができた。最後に、互いの国の手話表現について質問し合った。日本の「元気」という手話表現が、フランスでは「All right」の意味で使われることを知るなど、形式ばらないやりとりの中においても、生徒の気付きや学びの様子が見られた。





②まとめ

オンライン交流実施後、Microsoft Forms を使用した選択式の質問と自由記述の電子アンケート調査を参加者に実施した。選択式の調査の結果、国際交流に対して積極的な回答が多かったことに加え、実際に現地に行きたいと回答する生徒が非常に多かった。

自由記述では「オンライン交流で印象に残ったこと、オンライン交流でうまくいったこと、次回のオンライン交流で取り組みたいこと」等を書いてもらった。「オンライン交流で印象に残ったこと」には、「フランス手話を用いて意思疎通を図れたこと」「住んでいるところが違っても、コミュニケーションをとることができるのだなと改めて感じた」など、相手と意思を伝え合うことができたことの喜びについて回答する生徒が多かった。「オンライン交流でうまくいったこと」には、「事前に資料を送っていたため、進行がスムーズになり、より多く交流ができた」など限りある交流の時間を事前の準備によって効率的に使うことができたという意見や、「発表する時にフランス手話で理解しているかどうか確認しながら進行できた」と伝え方を工夫したことによって相手の理解が深まったと実感する記述が見られた。「次回のオンライン交流で取り組みたいこと」にはそれぞれの国の伝統的なゲーム、ジェスチャーゲームなど、オンラインで楽しめるゲーム型の交流を望む記述が多かった。

オンライン交流の様子やアンケート調査の結果から、異文化交流や国際交流への意識の高まりや、英語学習に対する意欲の向上が示唆され、オンライン交流が有意義であることが確認された。一方で、オンラインのみならず、直接会って交流したいという気持ちが強まっていることも確認することができた。本年度のパリ聾学校とのオンライン交流は、ただ相手校の生徒とコミュニケーションをとるだけでなく、その準備段階において学年をまたいで交わした生徒同士のやりとりが有意義な学びになっていた。今後も、パリ聾学校の生徒と本校生徒が主体的に対話できる交流を実施していきたい。

（文責：澤口真弓、田中豊大、田万幸子、久川浩太郎）

３．高等部専攻科造形芸術科生徒作品による台湾の聾学校との国際交流活動

（１）概要

平成 29 年度より始まった本校高等部専攻科造形芸術科と臺北市立啓聰學校と台南大学附属啓聰學校による日台聾学校美術交流展では３校の生徒作品を通じて絵画やデザイン、工芸などの作品を発表する機会となっている。今年で３回目を迎える本展も市川市南口駅前図書館ギャラリーを第一会場として１月５日から１月 27 日までを会期とし、第二会場は１月 28 日から１月 30 日まで市川市芳澤ガーデンギャラリーにおいて造形芸術科卒展と合同開催を行った。

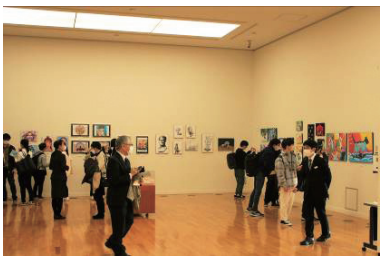
（２）展示に向けての活動

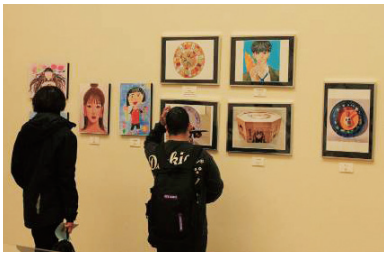
展示作品については毎回、事前に台湾両校に作品画像の提供を依頼し、オンラインストレージを利用して画像データの交換を行った。これらを本校で出力し、展示可能なパネル形式に整えている。各会場では設置されている展示壁面に学校ごとに作品をレイアウトし、交流活動の紹介パネル等も掲示した。生徒たちは文化祭の展示で得た作業経験をいかし、手慣れた様子で作業を進めることができた。

（３）振り返りの取り組み

展示期間中は双方の会場共に多くの来場者に恵まれ、両国の生徒作品への高い評価を得ることができた。専攻科生徒の芳澤ガーデンギャラリー見学時に、鑑賞と同時にそれぞれの感想を記述する時間を設けた。伝統的な中国絵画の模写に始まり、現代的なデザインの表現まで、多様な作品を前にして、生徒達は自らに通じる感性を感じ取っている様子がうかがえた。会場の様子と生徒の感想について今後台湾へ送付し、日本での交流展を報告していきたい。

【日台聾学校美術交流展】





（文責：青柳泰生）

附属大塚特別支援学校の国際教育の取り組み

１．本校の国際教育の特徴

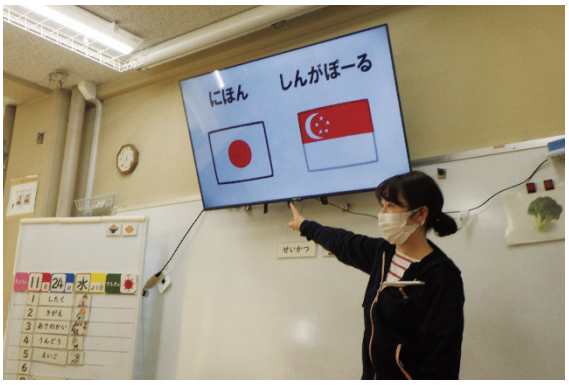
本校の国際教育の目的は、幼児児童生徒が自国や他国の文化に興味をもち、大切にしようとするとともに共に学び合うこと、教師が自国や他国の文化を尊重しながら互いの教育力を高めることである。幼児児童生徒たちは、様々な国の文化に触れながら、自国の文化の良さや特徴について触れ、ALT 等との学習で覚えた単語などを使ったりし、様々なコミュニケーションを行ってきた。教員も協定を結んだ学校との直接の交流会やオンラインを使った教員同士の授業研究、協議などを行ってきていたが、本校でも昨年度からの新型コロナウイルスの影響により、十分な国際交流が難しくなっている現状にあり、これまで交流していたインドネシア共和国チパガンディ特別支援学校との交流は滞ってしまった。そのため、新たな交流先を探すことが今年度の大きな課題となった。

２．オンラインを活用した交流

新に学校間交流をすることになったのは海外の日本人学校であった。幼児児童生徒同士の文化理解交流として、２校の児童生徒とオンラインを活用した交流を行うことができた。

まず１校目はシンガポール日本人学校チャンギ校である。支援学級の児童７名と本校小学部の児童８名が Zoom を使って交流を行った。

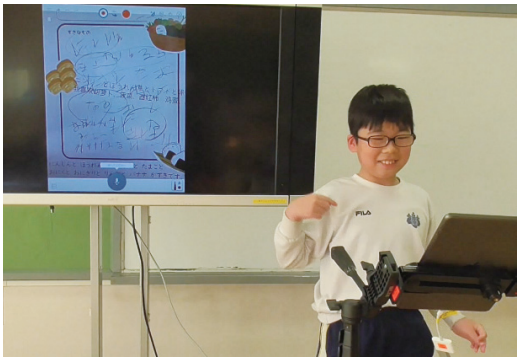
事前に児童たちはシンガポールについて担任から話を聞いたり、写真を見たり、国旗を確認するなどして行ったことがない場所を学習した。交流会ではお互いの学校紹介を行ったり、一人ずつ自己紹介を行ったりした。本校からは作成したダンスの動画を共有し、一緒に踊って楽しさを共有することができた。



交流を行った児童たちからは、「ダンスが楽しかった」「プールが２つもあるなんていいな」など感想があり、後日送られてきたメッセージカードを喜んでじっくり見ていた。また今回は全校でつなぐことはできなかったため、給食室と連携し、その日の給食にシンガポール料理を出してもらい、文化の共有につなげた。いつも出ないメニューに各部話題が広がったり、デザートのマンゴーにも中高生からもおいしかった、また食べたいなどの感想が聞かれたりした。

２校目は中華人民共和国の広州日本人学校である。こちらとはビデオレターのやりとりを行った。本校のビデオレター作成では、「しゃべり描きアプリ」（三菱電機株式会社）を使用し、自分の発表した言葉を中国語に翻訳して表示する方法を用い、外国の言葉に触れることにした。

「しゃべり描きアプリ」は話した言葉を文字テキストに変換できる機能がある。指でなぞった軌跡に沿ってテキストを表示することができ、筆談や多言語に翻訳することもできるコミュニケーションアプリとして開発され、本校でも各学部で活用している。今回の交流では、中国について学習した後、自己紹介で自分の好きなものを発表するビデオレターを作成した。その際に自分が発表した「私は～が好きです」が中国語の漢字ばかりの文字で表示されたり、同時に中国語でしゃべってくれる言葉を聞いたりすることができ、ビデオレターづくりでも外国の文化に触れながら楽しく参加することにつながった。



相手先の広州日本人学校からは４年生が作成したビデオレターが届いた。中国の食文化や気候、言語などについてグループごとにプレゼンテーションをした物を送ってもらった。のりものグループでは、中国のスクールバスやタクシーについて写真を交えて紹介をしていた。また中華料理グループでは、広州地方の料理は蒸し料理が多いと紹介をしていた。どの発表も写真を添えたり、手話を使ったりしてくれており、本校の児童にとっても大変分かりやすい動画だった。

本校から参加した児童は小学部の中学年と高学年だが、食べ物や乗り物、言葉など自分の好きなカテゴリーの発表に興味を持ちやすく、国が変わると違うことがあることに気づくことができた。中学年がビデオを見た時には、中国には高い建物が多いという地理建物紹介の写真のうち、広州タワーの写真が注目を集めていた。多くのグループ発表のなかでも、こちらからビデオレターを作成した際に「しゃべり描きアプリ」を使用して中国語の言葉や文字にふれたことから、中国語グループの発表に特に興味を示す児童が多かった。中国語での挨拶と、数字を指で表す時の違いを見て、ビデオを見ながら一緒に声に出して言ってみたり、手の真似をしたりする様子がみられた。

３．交流をとおして

今回のコロナ禍での国際交流は、オンラインを活用し、離れた場所との交流をオンタイムとビデオレターのやりとりで実施した。本校でも通常授業をオンラインと対面とのハイブリットで行っていることが多いため、幼児児童生徒が抵抗なく参加することにつながっている。また、今回の２校はどちらも日本人学校との交流であった。そのためお互いに日本語で話すことができた。このことは低学年の児童であっても抵抗なく参加することができ、お互いに国際交流へのハードルが低くなったといえる。さらにお互いの伝えたいことも伝わりやすく、これまでの国際交流とはまた違った利点も見つけることができた。

コロナ禍の不安定な中、新しく交流を行うことにはお互いの学校にとってもかなり難しさがあると今年度の実践を通じて感じた。しかし、その中でも教員として、子供たちの成長のために努力しようとする姿勢がどの学校にもみられ、交流にむけて連絡調整などをする中で、コロナ禍における実践の大変さや、相手の子供たちのために分かりやすいプレゼンテーションをつくろうとする姿勢などを共有することができたことが大きな成果であると考える。実際の活動をとおして、幼児児童生徒たちの様子からお互いの国のことを知ろうとする興味関心の高まりだけでなく、離れたところにいる友達を思いやる気持ちの育ちなどをみることができたことも成果である。

今後の国際教育も、様々な形を模索し、よりよい形を考えていくことが求められていくと考える。本校が実践したような海外の日本人学校との連携も、教材、指導法を高め合っていくことや、改めて自分の国の紹介したい所などに気付いたり、より良くしようとしたりすることなどにつながるのではないかと考えている。様々な視点で国際教育を捉え、幼児児童生徒の興味関心や理解を促していけるように努めていきたい。

附属桐が丘特別支援学校

国際的視野の獲得と自己発信の方法を探る桐が丘 ―オンライン交流を通じて―

１．本校の国際教育の特徴

附属桐が丘特別支援学校では、国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲のある児童・生徒の育成を目標に掲げ、国際教育の実践を全校で行っている。

本校の国際教育活動としては、国際交流協定を締結している韓国・広州セロム学校や台湾・国立南投特殊教育学校及び国立和美実験学校との交流事業がある。例年だと、代表児童生徒を送り、交流活動や公共交通機関の利用体験、食文化を含む異文化体験等をするが、長引くコロナ禍で、この２年ほどは活動が満足に行えない現状がある。

その中でも、数年間 Skype を利用して韓国や台湾の交流締結校とやりとりしてきた経験を生かして、対面せずとも各方面と交流し、国際的視野を獲得し、また、自己発信する方法がないか探った。

２．活動報告

（１）韓国・広州セロム学校、台湾・国立南投特殊教育学校・国立和美実験学校との交流

コロナ禍において、今年度は各学校とＥメールのやり取りをするに留まった。例年、代表児童生徒渡航前の事前指導で行っているようなオンライン交流を図ったが、本校も韓国・台湾も児童生徒が登校を控える時期があったことで、タイミングが合わせられなかった。昨年度、e-スポーツを取り上げ、広州セロム学校とゲームを通じた交流を図ったが、これについては方策を引き続き検討したい。

（２）給食を通した各国料理の体験

本校は、小学部から高等部まで自校式給食を提供しており、韓国や台湾をはじめ、海外のメニューもコンスタントに献立に登場する。児童生徒は肢体不自由を有することに加えて、このコロナ禍で、実際の海外渡航がますます遠いものとなった感があるが、食事を通して様々な国や、その文化に興味を抱くことができることを狙っている。

2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会が迫る時期に合わせて、７月 13 日にタイのメニューが出された。（写真３・４）今年度、総合的な学習の時間に小学部３・４年生が米をテーマとしていることもあり、日本と海外の米を比較できるような献立となった。児童生徒は、前の週に出さ

写真１

写真２

れた、日本の古代米の一種である赤米を思い起こしながら、タイ米のメニューを味わった。児童生徒にとってあまり馴染みのないメニューであると思われるが、低学年にもきれいに食べきる姿があった。（写真１）

12	月	②鮭（さけ）のムニエル　インゲン添（ぞ）え ③ミネストローネ	④りんごジャム ⑤牛乳	④さとう		んご	578 674
13	火	①ジャスミンライス ②ガパオ風（ふう）炒（いた）め ③ヤムウンセン	タイ のりょうり ④オレンジジュース	①この（ジャスミンライス），②かたくり こ，さとう，サラダあぶら，③はるさめ，さとう，すりごま	②とりにく，みそ，③えび，④ぎゅうにゅう	②ピーマン，パプリカ，たまねぎ，にんじん，しめじ，もやし，パプリ ル，にんにく，③きゅうり，みずな，だいこん，にんじん，レモン，④オレンジ	433 526 598
14	水	①冷（ひ）やしうどん	③バナナ	①うどん，かたくりこ，さとう，マヨネーズ，サラダあぶら，②さとう，ごまあぶら	①タマゴ，ワナ，②おから，あぶらあげ，④ぎゅうにゅう	①トマト，もやし，こまつな，はくさい，きゅうり，②にんじん，あおねぎ，しいたけ，③バナナ	613 651

写真３

写真４

また、全国学校給食週間の１月 27 日には、本校の教諭がオランダに赴任した縁から、オランダ料理が予定され、各学級に掲示、家庭に配付される給食ミニ新聞でも取り上げられた。（写真５・６）あいにく 24 日より、新型コロナウィルス感染症の感染拡大予防から本校がオンライン授業・給食中止となったため、実際の提供はなかったが、その日に向けて本校小学部５年生のクラスがオランダの日本人学校に学ぶ５・６年生の児童とやりとりをした。

26	水	②八丈島はちじょうじま)産(さん) さつま揚(あ)げのねぎ生姜(しょうが)焼(や)き ③小松菜(こまつな)のごまみそ和(あ)え	④牛乳	すりごま	うにゅう	うが，ごこまつな，もやし，しめじ	637 701
27	木	①食(しょく)パン ②スタンポット ③トマトウンスープ	オランダ のりょうり ④スライスチーズ ⑤牛乳	①パン，②じゃがいも，バター，③かたくりこ，サラダあぶら	②ウインナー，チーズ，ぎゅうにゅう，③とりにく，④チーズ，⑤ぎゅうにゅう	②ほうれんそう，にんじん，たまねぎ，マッシュルーム，③トマト，たまねぎ，キャベツ，にんじん，セロリ	543 636 748
28	金	①ポークカレー	ほっさくとみかんからさまれた スッキリとしたきさとさわやかな香り ③福神漬(ふくじんづけ) ④スイートスプリング	①こめ，じゃがいも，ルウ，サラダあぶら，②さとう，サラダあぶら	①ぶたにく，②わかめ，③ぎゅうにゅう	①たまねぎ，にんじん，マッシュルーム，セロリ，にんにく，しょうが，②だいこん，きゅうり，キャベツ，③だい	567 664

写真５

写真６

まず、在オランダ児童が名物料理を紹介したり、オランダ語を使って屋台で買い物に挑戦したりする動画を送ってくれ、それをオンラインで見た本校児童が、下記破線枠に示すような質問や感想を送った。時差が８時間あることにより、オンライン会議システム等を使っての直接対話は設定が難しいが、在オランダ児童とのやりとりは現在、まさに進行中である。

オランダのフライドポテト・フリッツ＝ friet の響きから、児童は馴染みのある菓子「プリッツ」＝ Pretz を思い浮かべたのだろうと分かる。そこからドイツのパン・プレッツェル＝ pretzel の話題が出ても面白いだろう。現地の児童がオランダ語で買い物体験していた年末年始に食べる伝統的な丸いパン・オリボーレン＝ oliebollen にも興味津々であり、微笑ましい。「知らなかった」「食べてみた

〈本校小学部５年生の質問や感想〉
・フリッツがポテトと同じだった。
・フリッツは，なんで細長いプリッツじゃなくて，ポテトと同じなのですか？
・最後に出てきたお菓子（味がついていなかったお菓子）を買う時に，何と言っていたのですか？
・ポテトみたいなものを，ソースにつけるんだな，と気付いた。初めて知った。
・丸いパンを，オランダで食べてみたいと思った。細長いお菓子も食べてみたい。
・丸いパンを，オランダで食べてみたいと思った。中になにが入っているのかなあと思った。

い」「もっと知りたい」という素朴な感想に、却って児童が受けたインパクトの大きさが感じられる。また、実施されなかった１月 27 日のメニューについても、献立表を見た小学部１年生が「どんな料理なの？」と栄養教諭に尋ねたり、別の家庭で夕食にオランダ料理を作ったと報告があったりした。給食を通して、遠い国の文化を経験することは、児童生徒の心に興味関心の種をまくことに似ている。今後も栄養教諭と連携し、留学生と交流した国等、様々な国の献立を取り上げ、各学部で食体験からも国際的視野を広げる機会を模索していきたい。

（３）高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流

令和３年 12 月７日５・６校時に高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流を総合的な学習の時間において実施した。今年はパキスタン、インドネシア、モロッコ、ナイジェリア、マラウイの現職教員が留学生として参加した。毎年行っている交流だが、今年度は事前打ち合わせも含め、すべてオンライン会議システム Zoom を利用した。（写真７）

初回９月７日に高等部２・３年生が ABC の３グループに分かれ、交流の計画を練った。留学生に楽しんでもらえる、日本らしい活動は何か、どう説明すれば伝わるか、数時間かけて意見を出し合った。10 月 26 日の事前顔合わせでは、「工作」「伝統舞踊」「ボッチャ」をテーマにした案に留学生に投げかけ、反応をみた。ただでさえ緊張する英語でのやりとりに加え、初対面で年上の相手、マスクを装着し表情が伝わりづらい状況、接続環境による会話の難しさ等、様々な悪条件が重なったが、温かく対応してもらえたこともあり、生徒たちはめげずに奮闘していた。

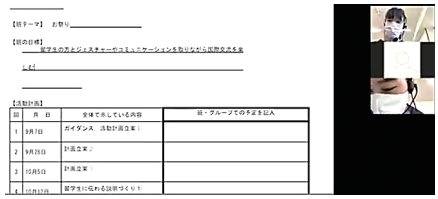


写真７

写真８

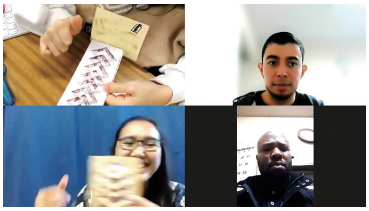


写真９（画像加工あり）

交流当日は、どのグループも和やかに進行した。（写真２）留学生は別々の場所から参加したためマスクをつけておらず、表情が読み取れたことも全体の雰囲気を明るくした。たとえば、折り紙を教える場面では、参加者の１人がうまくいかなかった際に留学生同士で教え合う場面もみられた。（写真８）高校生は折り方を伝えるためにあらかじめ台本を用意しているが、台本にないエラーに弱い。留学生同士で「そこの手順が違うよ」等と自由に会話してもらえたことは、生徒にとってより自然で流動的な会話に参加する体験となり、貴重だった。

また、盆踊りや紙細工等、指示が伝わった際に「できた！」と感動が生まれ、自然と歓声が上がったり、親指を立てる等ジェスチャーで喜び合ったりする場面が見られた。（写真９）人種や言葉を超えて喜び合う体験もまた、生徒にとってかけがえのない機会となった。

（４）外務省高校講座

令和４年１月 25 日５・６校時に、高等部生徒全員で外務省高校講座を受講した。高校講座とは、「次代を担う高校生を対象に、外務省職員が講演を行い、高校生の外交政策や国際情勢等に対する関心や理解、意識の向上を図ることを目的とし」「外務省の業務について理解を深めることで、進路選択の際の参考としてもらいたいと」開催されているもので、本校では、例年、韓国台湾交流報告会を行っている時間の枠を使い、初めて受講した。学部の参加目的を（１）外務省の業務について講話を聞くことで、外交政策や国際情勢等に対する視野や見聞を広げ、国際社会で多様な文化的背景を持つ人との交流への関心や理解、意識の向上を図る。（２）卒業生による海外での暮らしや障害者雇用等の実体験を聞くことで、卒業後の生活や働くことのイメージをより明確にし、進路選択に役立てる、と設定し、事前にそれぞれ質問を準備して臨んだ。

当日は、外務省 OST（オフィス・サポート・チーム）所属の浅井氏を講師に迎え、オンラインで講演を聴いた。OST とは、外務省において「障害をもつ職員が活躍できる場を提供すること、多忙な省内各課室の業務を支援することを目的として設置された部署」であり、2019 年 3 月以来、障害を有する職員が日々、様々な業務にあたっているという。

氏は現在、国連や WHO などの国際機関における空席情報取りまとめ、省内で用いるマニュアル等の日→英仏翻訳、経済安全保障に関する記事の要約等を行っている。本校の卒業生であることもあり、生徒たちは熱心に話を聞き、質問をした。（写真 10）講演の内容は（1）外務省の仕事や役割について（2）外交政策や国際情勢について（3）外務省職員が任国における日々の業務を通じて培った異文化コミュニケーションや国際交流の秘訣について（4）当校卒業後の進路選択や外務省における障害者雇用、及び現在の働き方について、という構成だった。

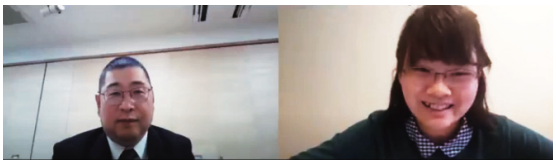


写真 10

写真 11

生徒が興味関心を抱いた事柄としては、外務省での仕事についての質問が多く、障害者雇用についても尋ね、丁寧に答えていただいた。外務省が、日本と国際社会の平和と安定のために組織されているという説明や、そこに障害を有する方が一員として働いているという事実は、生徒にとって大いに刺激となったようだ。

質疑応答で、海外で利用して便利だったサービスについて尋ねた際は、「移動サービスくらいしか使わなかった。この 4 年ほど、日本で暮らすようになってからの方が、よく福祉サービスを調べて利用している。海外にいた当時を振り返ると、若かったのか、一人で頑張るのだと意固地になっていたところもあったが、もっと調べればよかったなと思う」という話があり、生徒たちも実体験に照らしてしみじみとアドバイスを受け入れたようだった。

他に、外国人とのコミュニケーションで困った際の心得や、学生時代の外国語の授業で今も生きていること等、生徒が日頃より抱えている悩みや疑問についてもざっくばらんに助言をいただき、最後は笑顔で拍手を送り、閉会された。（写真 11）今後、生徒たちが国際的活動をするにあたって具体的なものの見方の例を示していただき、高等部生徒全員が国際的視野、学びの推進力を得る好機となった。

5. 各附属学校のイングリッシュルーム活動

附属小学校

子どもたちの充実した国際理解教育に向けて

① 活動報告１　留学生との交流会

小学校では、筑波大学に在籍している留学生との交流を継続して行ってきた。本年度は感染対策を講じて対面での実施ができた。

インドネシア、ナイジェリア、コロンビア、パキスタン、エルサルバドル、モロッコなど様々な国の方々と一緒に、自己紹介や英語を使ったビンゴゲーム、留学生のプレゼンテーションを聞くなど充実した時間を過ごすことができた。また、英語だけでなく、それぞれの国の「こんにちは」「ありがとう」「一緒に遊ぼう」といった言葉に触れ、言葉の多様さ、その違いも楽しんだ様子であった。

② 児童生徒の感想

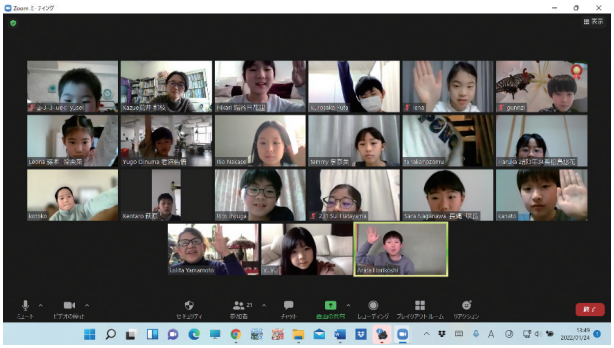
・みんなで自己紹介が英語で出来て、コミュニケーションをとれて達成感を感じました。
・英語でのコミュニケーションがうまくとれた。５年生のときよりうまくアブラハムさんと話せたなと思いました。
・エイブラハムさんの国のことや、好きな食べ物を聞けて、僕の好きな食べ物や好きな色などをいうことができた。少し分からなかった言葉もあったので、そういう言葉も調べて分かるようにしたい。
・５年生の時よりも圧倒的に英語が分かるようになり、とても楽しかった。５年生の時よりも多く英語を学んでいたので、前回のオンライン交流よりも自信をもって話したり、質問することができた。
・自己紹介は上手にできました。でも、思ったことを英語で全部話すことができずに苦労したけれど、友だちと相談して何とか乗り切ることができました。もっと勉強してスラスラ言えるように努力したいです。今度は、自分の趣味について詳しく伝えてみたいです。

③　活動報告２　ALT とのイングリッシュルーム

ALT の先生とのイングリッシュルーム（Lily's room）を中休み、昼休み、放課後の時間に実施し、３年以上の希望者に対面で行った。これまでは留学生との交流会を中心に行ってきたが、少人数で ALT の先生と英語に触れる時間を設定することで、授業以外でも英語に触れる機会を設けることができた。

英語が好きな児童はもちろん、授業で十分に話すことができずにいた児童なども意欲的に参加し、歌や本、体を動かして遊ぶ活動などを行うことができた。ALT の先生は、英語が苦手な児童も参加しやすいよう、活動内容を工夫しながらイングリッシュルームを運営していた。英語力の向上よりも、英語を触れ、楽しむことを中心にすることで、今後も多くの児童が利用できるようにしていきたいと考えている。

また、休校期間中は３年生の全てのクラスにオンラインで実施することができた。多くの児童が参加し、Who is it? ゲームなどを通じて英語でのやりとりを楽しんだ。



④　児童の感想

・授業とは別の時間にもリリー先生と話しをすることができて、とても楽しかったです。
・踊ったり、英語の歌を歌ったりするのが面白かった。小さい時に聞いたことがある歌もあったのでもっと英語の歌を知りたいなと思いました。
・英語を勉強するというよりは、英語で何かをするという感じなので、とても面白かったです。
・授業だとたくさん話すことはできないけれど、この時間はたくさん話すことができてうれしかったです。
・友達を誘って参加しました。あまり英語が上手ではないけれど、楽しい時間を過ごすことができました。

今年度の English Room 報告

① 昨年度同様、登校形態に応じて実施

今年度も新型コロナウィルス感染状況に応じて、登校形態が様々に変更されたが、昨年度の経験を活かし、English Room は最大限開室するようにした。コロナ対応の現在では、委員会や部・研究会活動などに参加する生徒以外は、原則居残り禁止となっているが、English Room に参加する生徒は居残りが認められている。居残る生徒は予約の際に「どこで待機するか」(図書室または所属する団体の活動場所)も明記し、学校として、どこに何名の生徒が残っているかを把握するようにしている。

基本的な実施形態は従来通りである。

・前期は週１回（火曜日)、後期は週２回（火・水曜日)、放課後に実施する。
・開室中は通常授業の Team-teaching の時間担当の ALT １名が常駐する。
・利用時間は１枠 15 分交代、利用人数は１枠２名までを原則とする。
・生徒は部屋の扉にある表に名前を記入して予約する。
・来室した生徒を毎週記録しておく。
・１年生の利用は後期からとする。
・アメリカ留学短期プログラム（2020 年度～一時中断中）の写真や参加者レポート、その他国際関係のチラシやポスターを部屋の外に展示している。

今年度は昨年度のような一斉休校はほとんど実施されなかったが、２月第１週（入試の週）が自宅学習となり、授業がすべてオンラインでの実施となった際は、English Room は zoom を用いてオンラインで実施した。翌週から対面での授業が再開したが、感染不安などの理由で、自宅でのオンライン学習を継続する生徒がどの学年にも数名ずついた。こうした生徒たちにも授業で行ったスピーチなどの発表活動にオンラインで取り組んでもらえるよう、希望者は放課後 English Room にオンラインで参加できるような措置をとった。

一方で English Room の利用者はこれまでに比べて半減してしまった。これは生徒の English Room 利用熱が下がったわけではなく、偏に予算の問題である。本校の English Room は 2012 年の開室以来 Team-teaching 担当の ALT が兼務してくれており、その年度から ALT が２名体制になり、クラスを 20 名ずつに分けての少人数授業も可能となったのだが、大変残念なことに、予算削減により今年度から ALT が１名に戻されてしまい、それに伴って English Room 担当も１名となり、連動してこれまでの半数の生徒しか来室できなくなってしまった。現在 English Room を担当している MacRae 先生は本校に 20 年近く勤務しているベテランで、本校の指導理念や生徒の様子なども熟知しており、同等レベルの人材を見つけるのは至難の業である。少人数でのきめ細やかな指導や、個々の生徒の目的に合わせた英語を用いる場の確保のためにも、ALT ２名体制の再実現を切に願っている。

② 生徒の感想

・最初は、先生の聞いていることと自分の言っていることのくいちがいが起きたりしていたが、最後の方では長い文で返せることもあり、本当に自分の成長が見えたので、とても嬉しかった。先生の言っていることが何となく分かるのではなく、正確に理解できるレベルをめざしたい。（２年生）

今年度のイングリッシュルーム活動

① 活動報告

2013 度から始まった「イングリッシュルーム」は、今年度９年目を迎えた。例年はマクレイ先生（附属中学校のイングリッシュルームも担当）には、前期木曜日の放課後は、各国際交流プログラムに参加する生徒に対して英語による研修を行い、前期および後期の金曜日の午後は、１コマ 20 分で生徒がマクレイ先生と英語の練習をお願いした。ボブ先生には、主に火曜日の放課後の英字新聞部の活動に参加をお願いした。以上のように、本校での「イングリッシュルーム」は、幅広く誰でも参加できる場として設定している。

2021 年度（コロナ禍）の活動は以下のとおりである。特別日課（短縮授業、および朝・放課後の活動の縮小）の期間は、以下のように、できるだけ例年の形に近い「イングリッシュルーム（予約制）」を実施した。

火曜日　放課後の 15 時 10 分から 16 時 10 分、英字新聞部の活動参加（ボブ先生）
木曜日　午後の５、６限目に選択授業のない３年生対象（マクレイ先生）
　　放課後の 15 時から 17 時の２時間、１、２年生対象（マクレイ先生）
金曜日　午後の５、６限目に選択授業のない３年生対象（マクレイ先生）
　　放課後の 15 時から 17 時の２時間、１、２年生対象（マクレイ先生）

今年度「イングリッシュルーム」を活用した生徒の目的は以下のように分けられる。

・「英語表現Ⅰ」の授業で行うスピーチの原稿の添削とスピーチ練習（１年生）
・国際交流事業への参加が決定した生徒の準備（２年生）
・大学入試に向けた英語のエッセイの添削（３年生）
・英語の運用能力を伸ばすため（１～３年生）

② 生徒の感想

今年度は、特にエッセイの添削（主に３年生）、「英語表現Ⅰ」でのスピーチの準備と練習（主に１年生）を依頼する生徒が多く、限られた時間帯ではあったが非常に好評であった。オンラインで開催された国際交流事業での準備をする生徒や、推薦入試の英語面接を控えた生徒は、「マクレイ先生は様々なトピックについて議論させてもらえるので非常に助かる」と感想を述べていた。英語を話す機会が減ったと感じる生徒もいて、「イングリッシュルーム」を使ってできるだけ英語を使う時間を持つようにした、という生徒も例年以上に多かったように思われる。（R4.2 月現在イングリッシュルームへの参加延べ人数は約 40 人）

その他の感想例：

・マクレイ先生のおかげで、授業課題のスピーチが上手にできた
・英作文を丁寧に添削してもらえて勉強になった
・進路の相談や様々な話題について英語で伝える良い機会になった

③ 今後へ向けて

次年度も、国際交流を含めた活動の制限が予想される。そのような状況であるからこそ、授業外でも生徒が個々の目的に合わせて英語を使用する場があることがとても大切であり。実際に使える英語力を伸ばしたいと考える本校生にとって、「イングリッシュルーム」がもたらす役割はとても大きい。生徒が安心して生きた英語に触れあうことのできる「イングリッシュルーム」を次年度もぜひとも実施し、最大限、生徒の学習をサポートしていきたい。授業を通して英語の発信力を高めることは必須であるが、授業外でも生徒が個々の目的に合わせて英語を使用する場があることがとても大事であり、「イングリッシュルーム」がもたらす役割はとても大きいと言える。

English Room：日常活動および海外研究発表とその先の支援

1．活動報告

本校のイングリッシュ・ルームは2013年にスタートした。月に２回ほど、放課後３：30～５：00に東大大学院の留学生に来てもらい、それぞれのご専門について語ってもらったり、語学部が英語ディベートのコーチを受けたりしている。（もちろん、希望者が参加することも可能である）

また、台湾・釜山への生徒派遣をする前に、現地で発表する研究プレゼンテーションの原稿チェックやプレゼン・コーチもしていただいている。中３のテーマ学習や高２の課題研究のScience Dialogue（講座の前半では科学系研究者のプレゼンを伺い質疑応答、後半では自分のテーマを決めて英語でプレゼン活動）。その際のコーチや、最後のプレゼンテーション大会のコメンテーターもしていただいている。登録されている方が６～７名おり、それぞれがプレゼン経験も豊富で、しかも英語を第２外国語としている方が多いので、学習者の英語学習の苦労も心得ており、英語のティーム・ティーチングでネイティブの方から教わるのとは違った利点もある。

ただ、今年度もコロナ禍の影響で、いずれもオンラインの実施となった。

2．生徒への影響

生徒には様々な形で刺激となっているが、特に最近は、語学部のディベートチームへのトレーニングに多大なる貢献をして頂いており、大会等での上位入賞の原動力となっている（１学期の休校期間中にはオンラインでの指導もして頂いた）。また、例年は中３テーマ学習・高２課題研究の「サイエンス・ダイアログ」での生徒の発表指導や、台中一中や釜山国際高校との交流での発表原稿・プレゼン指導にもご尽力頂いている。今年度は、釜山国際高校とのオンライン交流をする事前準備として、画面共有によるプレゼンの練習を行う際、今年度からイングリッシュ・ルームの講師も兼ねていただいている本校のALTにより、オンラインを通じて、発表の際の注意点や、英語表現など修正もしていただいた。事前に適切なアドバイスをいただくことは、生徒にとって本番でプレゼンする際の自信にもつながっているようである。

English Room もオンラインにて実施

サイエンス・ダイアログの審査もオンラインで（昨年度）

（文責：研究部・国際交流担当　八宮孝夫）

楽しい英語活動と WWL 校としての活動の両立を目指して 2021-2022

① 活動報告

2013 年より、本校ではイングリッシュルームの活動として、昼食時の English Lunch（イングリッシュランチ）と、放課後の English Salon（イングリッシュサロン）に、週 1 回取り組んでいる。しかしながら、COVID-19 が原因で English Lunch は中止に追い込まれた。今年度は、オンラインでの活動、及び放課後の English Salon の活動がメインとなった。授業で学んだ事を実際にアウトプットして、ネイティブとの意見交換や会話を楽しめるようなディスカッションや、ゲームも数多く取り入れた。結果昨年度に比べ参加数も増え生徒の満足度も更に上がっているように感じる。また定期的にイベントも開催した。生徒は活動を通して、他国の文化を知識として知るだけでなく、体験を通じて味わうことで生徒の想像力や表現力を養うことができたようである。来年度も引き続き日頃からネイティブ教員と交流することで、文化・習慣の違いやコミュニケーション上のふるまいなども知り、国際的な対人コミュニケーションスキルが身に付け、異文化・国際理解にも繋がるような活動にしていく。

② 児童生徒の感想

・英検の２次試験対策をしてもらい、落ち着いて試験に臨めた。（１年女子）
・授業の課題で、たくさんアドバイスをもらい、完成度を高めることができた。（２年女子）
・タイ出身です。日本・アメリカ・タイの文化を比較することで僕自身のアイデンティティについて考える貴重な活動になっている。パンデミックの中、ネイティブの先生と気軽に話す事ができるというのは非常に魅力的である。来年度も引き続きイングリッシュサロンに参加して、語学以上のものを身につけていきたい。（２年男子）
・来年から都内の国際コミュニケーション学部に進学する予定です。ネイティブの先生には TOEFL や英検などを対策して頂き非常に助かりました。私の場合イングリッシュサロンは受験対策にも大いに役に立ちました。３月で私は卒業しますが、素晴らしい伝統を後輩にも引き継いでってほしいです。

（文責：神田智史）

附属視覚特別支援学校のイングリッシュルーム

【小学部】

今年度は、５・６年生外国語の ALT として、また３・４年生外国語活動の特別講師として２名の米国人講師にご協力いただきました。お二人ともボランティア精神豊かな方々で、視覚障害学生の支援をしている CWAJ（カレッジ・ウィメンズ・アソシエーション・オブ・ジャパン）に所属されています。

５・６年生の外国語では、Ruth 先生に月１回来校していただき、ネイティブの英語に触れる機会を設けました。Ruth 先生は元音楽教師で、英語をリズミカルに発音することで英語と音楽を融合させる工夫をされています。英語が聴きとりやすくて覚えやすいと児童には好評でした。

ある日の授業の様子です。Ruth 先生はパラリンピック開催時にボランティアとしてアクアティクスセンターへ行ったことをお話しされました。本校卒業生の木村敬一選手がバタフライで金メダルを取った話題など、子どもたちは興味津々に聞いていました。質問の仕方・答え方の学習では、何の動物かを当てるクイズをしました。“Do you ～ ?”“Can you ～ ?”と質問し、動物になりきった児童が“Yes, I ～.”“No, I ～.”と答えます。その答えを聞いて、何の動物なのか分かった児童が動物名を英語で答える姿が見られました。

３・４年生の外国語活動として、月に１回 Nancy 先生のイングリッシュ・ワークショップを設けました。日常会話で使われるフレーズや単語、子ども向けの歌やダンス（エクササイズ）、季節や行事にちなんだクラフトタイムの活動を行いました。

Nancy 先生は視覚障害に配慮した様々な教材を準備してくださいました。例えば、天気を表す言葉の学習では、霧吹きで水をかけて rain、うちわであおいで windy、フワフワの綿で cloudy、携帯用カイロのぬくもりで sunny、氷の冷たさで cold というように触覚で体感できるようにしました。また、ハロウィーンの季節には本物のかぼちゃで作ったジャック・オー・ランタンを持参して、子どもたちに触らせてくださいました。

クラフトタイムでは、紙皿で作る壁飾りやクリスマスリース、靴下で作る snowman、松かさで作る bird feeder 等々、米国の子どもたちが親しんでいる工作を取り入れました。Nancy 先生が英語で作り方を説明し、子どもたちはそれを聞きながら作業に取り組みます。Nancy 先生は子どもたちが作業しやすいよう事前の準備を念入りに行い、大変熱心に指導してくださいました。身体や手先の動きを取り入れた活動を英語で行うことで、英語をより理解でき、英語に親しむことができるイングリッシュ・ワークショップとなりました。

（文責：中村里津子）

【中学部・高等部】

① 活動報告

中学部では、１年の中で行事が比較的落ち着く秋以降に開始し、１年生が２回、２年生が３回オンラインで実施した（令和４年２月15日現在）。授業時間内に実施することで、全員が確実に参加できるようになった。講師はニュージーランド出身のネイティブスピーカーにお願いし、初回は自己紹介、２回目以降はニュージーランドの文化について尋ねたり、年末年始の過ごし方について話し合ったりした。

３年生は、引き続き放課後に希望者向けの実施とし、３学期に自由な会話または英検の２次試験の面接練習を主な内容とした。すべて対面で４回の実施ができた（令和４年２月15日現在）。講師は、ALTとして通常の授業にいらっしゃっている、アメリカ出身のネイティブスピーカーの方にお願いした。

高等部では、今年度も７月から３月まで、計28回のイングリッシュルーム活動を実施した。講師は、中学部と同様に、ニュージーランド出身のネイティブスピーカーである。

開催方法は、COVID-19の感染拡大防止のため、すべてオンラインで実施した。また、クラスを２分割し、火曜日を高１と高２、金曜日は高３のみを対象とし、可能な限り週に２回実施した。また、生徒同士の密を避けるため、グループ活動は行わず、年度を通して１対１で行った。１人６分間という限られた時間の中で、講師の先生が話題を用意してくださり、生徒も苦労しながらもコミュニケーションを楽しんでいた。

② 生徒の感想

〈中学部〉

・最初は緊張していましたが、クイズや質問などをしているとだんだん楽しくなってきました。新しい単語も知れて良かったです。またやりたいです。
・前はあまり発言できなかったけれど、今回は何個か質問ができたのでうれしかったです。次回はもっとたくさん質問したいです。ニュージーランドではほとんど電車に乗らないということを知って、すごく驚きました。実際に英語で会話してみると、教科書とは違う表現や要領を知れるので、次回もとても楽しみです。
・少し緊張したけれど、楽しかった。ニュージーランドのことは知らないことばかりで、質問できて良かった。アベッシュ先生の英語はすごく聞き取りやすかった。画面越しだったので、「ラム」が「ラブ」に聞こえてしまったりはしたが、それでもとても聞き取りやすく、わかりやすかった。会話を重ねていけば、自分のリスニング力もついてくるのではないかと思った。
・今回のイングリッシュルームで私はアベッシュ先生に質問しました。「ニュージーランドでオススメの場所はありますか。」と聞いてみました。アベッシュ先生は「たくさんの自然がある」と言っていました。コロナが明けたら見に行ってみたいです。英語は苦手ですがアベッシュ先生とお話するのは楽しいです。

〈高等部〉

・行事や文化・スポーツと幅広く話し、日本のスポーツや文化の英語表現や発音などを知ることができました。また、話す力も伸ばすことができました。ありがとうございました。
・実践的な英会話を体験させて頂けたことを、大変うれしく思っています。日常生活の中で殆ど巡り合えない、貴重な体験をさせて頂きました。Mr. Aveshとの会話を通して、英語を学び、実際に使用する楽しさを実感することができ、英語の学習に意欲的に取り組むことができるようになりました。
・私は、English Roomという学んだ英語をアウトプットする機会を得ることができ、より英語が身についたと感じている。授業でインプットした語彙や文法を、実際に会話をすることによって自分の中に経験として取り込むと同時に、「自分の考えていることを英語でもっと伝えたい。」という思いも生まれた。これからも学んだことをアウトプットする場、英語へのモチベーションを高める場

としても English Room を活用していきたい。

・アベッシュ先生、毎回お忙しい中、貴重なお時間を割いて、私たち本校生徒のために、イングリッシュルームを開いて下さり、誠にありがとうございます。私の拙い英語を、理解して下さり、分からない単語や、より良い表現方法について、優しく丁寧に教えて下さるので、毎回楽しく、多くの事を学ばせていただいています。また、毎回アベッシュ先生が話題を振って下さるので、非常に話しやすいと感じています。毎回、時間を忘れてしまうほど、楽しくお話させていただいています。これからもよろしくお願いいたします。また、お会いできる事、お話させていただける時を心待ちにしております。

（文責：片山　翔）

附属聴覚特別支援学校

「わかった、伝わった、楽しい」イングリッシュルームを目指して

１．活動報告

本校の子供たちは、音声に加え非言語情報（話し手の表情や口の動き）、視覚情報（文字、絵等）など様々な情報から話の内容を理解しコミュニケーションを取っている。そこで、コロナ禍におけるイングリッシュルームでは、フェイスシールド着用したり、音声認識ソフトやＩＣＴを活用した文字情報を提示したりして、子供たちが英語のコミュニケーションを楽しむことができるように工夫した。

小学部、高等部普通科、高等部専攻科担当のイアン先生、中学部担当のコリン先生のお二人の講師は、動きを伴いながら表情豊かに、また、文字情報を適宜活用して本校の子供たちの特性や強みを活かしたイングリッシュルームを展開された。

①　小学部

小学部は、イングリッシュルームを「聴覚障害児にとって貴重な言語学習の機会」と位置づけている。イアン先生との交流を深めることと、３学年以上は、活動を通じて英語の楽しさを味わうことをねらいとしている。１、２年生は身近な物の名前をテーマにイアン先生とのやり取りを楽しんだ。終わってからも英語を話す姿が見られた。２年生は「道徳」に当たる教科がアメリカにはないことにとても驚いていた。３年生は「What ～ do you like?」を使い、好きな食べ物やスポーツについてやり取りした。イアン先生の表情豊かで明るい応対に、「もっとお話してみたい」、「緊張したけれど、伝わってよかった」などの感想が聞かれた。４年生は「Do you have a ～ ?」を使って、色当てゲームをしたりアメリカのクリスマスの話を聞いたりした。子供たちは、アメリカの子供たちはクリスマスプレゼントを１人10個ももらえることにとても驚き、日本との違いを感じることができた。５、６年生は、子供たちの自己紹介に対してイアン先生に質問してもらった。子供たちからは、「あらかじめ話すことを考えておいてよかった」、「イアン先生の質問がわかって、それに答えられたのがうれしかった」といった感想が聞かれ、分かること、伝わることの楽しさを実感できた。

②　中学部

新型コロナウイルス感染症対策としてネイティブ講師と生徒、生徒同士の距離を十分に取り、発言する際にはフェイスシールドの着用を徹底した。また、声量をあまり大きくすることができないので、ミニホワイトボード等を用いて、文字情報を十分に活用し、コミュニケーションを取った。講師も本校での活動が長く、簡単な手話や指文字も覚えて使っている。

中学部では、従来から全員が講師とコミュニケーションを取る機会を保障するために、学年やクラスを指定して活動しているが、対象生徒以外も廊下や

階段で講師とすれ違うと気軽に挨拶を交わしている。また、通学時に学校外で会うこともあり、「今朝、先生に偶然、会ったんですよ！」と生徒から報告を受けることがある。生徒達は予定表を見て「次は○日にいらっしゃるんですね」と講師の来校日を楽しみにしており、「通院の予定と重なっているんです。変更できませんか？」と願い出た生徒がいて参加できるように変更したこともあった。また、「次に来校したら聞きたいことがあるんですが、英語はこれで大丈夫ですか？」と英語科の教員に質問する生徒や学級日誌や連絡帳のコメント欄に「今日はイングリッシュルームが楽しかった」などと感想を書く生徒も多い。

③　高等部普通科

高等部普通科では、昼休みの時間を使って３回実施した。イアン先生には、今年度の普段の英語の授業にも協力していただいているため、生徒は安心してコミュニケーションを楽しむことができた。学校生活や趣味などについて、その内容に関する質疑応答を英語で行う形式で進めた。生徒が積極的にイアン先生に話しかけ、ランゲージカフェのように自由な雰囲気の中で会話を楽しむことができた。生徒は聴覚に障害があるため、口頭のみの英会話は難しい。できるだけ教員の通訳を介せずにコミュニケーションがとれるように確実な文字情報提示を心掛けた。具体的な手段として、イアン先生の発話は三菱のしゃべり描きアプリ等を使用して文字情報をスクリーン上に投影した。文字情報を確認しながら会話を進めることで、聴覚障害のある複数の生徒とイアン先生の自由な会話が成立できている。生徒にとって、イアン先生からの興味深い内容の発問もあり、自然な英語にふれる貴重な時間になっている。生徒の感想には「会話が弾み、楽しかった。」というものが多かった。高等部普通科の生徒は委員会活動や部活動などの特別活動も多いため、参加が難しい生徒もいる。しかし、イングリッシュルームは学年の枠をこえて、自由に語り合える場になっている。

④　高等部専攻科

専攻科では、ビジネス情報科・造形芸術科、歯科技工科に分かれてフリートークの時間を過ごした。はじめは緊張した様子だったが、イアン先生のおおらかで優しい受け答えにすぐに打ち解け、２回目以降はその時々の興味関心の赴く内容について話した。

以下、生徒たちの感想である。

「日本との文化の違いやその国のおすすめ、良いところなど、貴重な時間を過ごせてとても楽しかった。」「実際に文章を作ってみて英文の使い方、話し方についても学ぶことができた」「英語が苦手だったが、イアン先生と話している時は、なんとなく少しは会話ができた気がする」「最初は正直話すのが怖かったが、イアン先生が盛り上げてくれたおかげで楽しさが倍になった」「表情を色々とあらわしてくれているので英語が苦手な自分でもコミュニケーション取れてとてもよかった」「楽しく勉強できた」「分かりやすく話してくれた」「様々な話を聞くことができた」「（先生の）リアクションが面白かった」など、全体的に英語でコミュニケーションする楽しさに触れることができたという感想が多かった。

附属大塚特別支援学校

知的障害特別支援学校におけるイングリッシュルーム活動

① ALT を活用した英語学習

今年度、本校では、ALT（Assistant Language Teacher：外国語指導助手）による英語学習の機会を幼稚部から高等部までの各部において、それぞれ年間 10 回程度設定した。異なる年齢段階における学習活動で、英語の歌や映像・絵カード・具体物を交えながら、子供たちが進んでやりとりしたり、簡単な日常生活での挨拶や自己紹介の言葉を個々に表現したりする姿が見られた。

② ALT による集団での英語学習の成果

幼稚部では、幼児の好きな絵本を中心に活動した。「できるかな」の絵本では、モニターを活用しながら、動物の動きを真似たり、歌ったりしながら英語を楽しんだ。小学部では、英語の質問に、身振りや手振りも使って英語で返答し、自分の好きな食べ物や遊びなどを次々と紹介して活動した。英語の歌や絵本も先生の豊かな表情や表現から意味を理解し、楽しむことができた。中学部では、最後の授業後に感想として、「授業が楽しい。」、「英語が話せるようになって、嬉しい。」等、英語を楽しんで学ぶ生徒の声が聞かれた。高等部でも、「英語で話したり歌ったりするのが楽しみだった。」、「ハロウィンのテーマでやりとりしたのが楽しかった。」等、積極的に学習に臨んでいたことが個々の感想に表れていた。

各部の取り組みを通して、子供たちが楽しく活動する中で英語や外国の文化に対する興味が深まり、意欲的な学びへと結びついてきている様子がうかがわれた。

附属桐が丘特別支援学校

持続的に児童生徒の国際的好奇心をくすぐるイングリッシュルーム online の在り方

①　活動報告

昨年度から、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、イングリッシュルーム実施が難しい状況が続いている。今年度に関しても、新年度が始まってからオンライン授業に切り替わる学部もあり、調整が難しく未実施のまま１学期が終了した。加えて昨年度は２名の外国人講師（以下、ALT）が小・中高に分かれて実施していたため曜日を分けて実施できていたが、今年度は１名体制となったため、曜日の調整も実施の難しさへと繋がっていた。

そのような中で、夏季休業期間中のイングリッシュルーム online は昨年度に前例があったため、Web 会議システム Zoom を用いて開設をした。具体的には、小・中・高の学部ごとにミーティングルームを設定し、さらにそのミーティングは各回 30 分で４～５名程度の少人数グループで行うこととした。理由としては、人数が多いことによって生じる会話の混線を避けるためである。また、出来るだけ多く参加できる機会を設定するため、開催回数も小学部７回×４日間（内１日は半日開催）、中・高等部３～４回×４日間に区切って実施した。

実施内容としては、各学部の習得状況や英語に触れている機会を考慮した。小学部では「挨拶の歌」や“How is the weather?”“In _____, it's hot.”のように「天気に関する英会話」表現、“It's a pencil sharpener.”のように「身の回りの持ち物を説明する」表現（写真１）、“I can do magic. Can you do magic?”のように「できること（can）」に関する表現等について、身振り手振りを交えながら、時には驚きながら、時には一緒に参加しているメンバーにお互いにヒントを伝え合いながら英会話の表現に触れていた（写真２）。中・高等部の生徒になると、短文だけでなく、複数文から連想して単語を考える“three hint quiz”や「なぞなぞ」を読み解いて答えるという発展した内容を扱った。生徒たちは、Web 会議システム機能の１つであるチャット機能を活用しながら積極的に英語を用いて参加していた。ALT からは“Read the clues and guess the answer before the time runs out.”という指示が与えられ、生徒たちは制限時間内でなんとか答えに辿り着いてみせようと今まで習った単語や知識を総動員して考えている様子が見受けられた。

２学期は引き続き未実施の状態が続き、３学期は木曜日に小学部低学年、中・高学年を対象とした２コマ、金曜日に中・高等部の生徒を対象とした１コマで予定していた。しかしながら、学校全体がオンライン授業へ切り替わったため、当初対面で予定していたイングリッシュルームをオンラインで実施する運びとなった。現状で、小学部と中学部が実施できており、児童生徒が夏季休業期間中のイングリッシュルーム online の時同様に、各自宅からミーティングルームに参加し、英語に触れる機会を得ている。

写真１（画像加工あり）

写真２（画像加工あり）

児童生徒の変容として、昨年度はオンライン上での会話のやり取りが中心だったが、英会話で表現するだけでなく、今年度は年齢が上がるにつれて、チャット機能で文字によるやりとりも織り交ぜながら臨機応変に対応していた。（写真３）これは、GIGA スクール構想によって１人１台 iPad 制度が導入されたことによって普段の学校生活でも情報機器に触れているためであると推測する。確かに対面とは違いオンラインであると直に触れ合うことはできないが、イングリッシュルーム online は離れていても英語を用いてつながることができる。直に ALT と関わり英語に触れる機会も重要であるが、対面に限らず国際的好奇心を継続して刺激し続けるツールとしてオンラインを含めた ICT 機器の効果的な活用方法も同時に模索していく必要性があると考える。

今年度はイングリッシュルームの開催回数も少なく、例年であればアンケートを行っている時期に全面的にオンライン授業へ切り替わったため、アンケートが未実施である。オンラインとの併用の可能性を今後も探っていくためにも、引き続き児童生徒や保護者のニーズを捉えていきたい。

写真３（画像加工あり）

6. おわりに
本学附属学校のコロナ禍での国際教育を振り返って

附属学校国際教育推進委員会委員長　濱　本　悟　志

今年度も引き続き COVID-19 感染拡大の影響で、異例の一年となった。どの附属学校も通常授業から学校行事をはじめとする特別活動まで大きく制限され、その中で 2020 年度の苦難を教訓に国際教育の推進を図った。児童生徒及び教員の海外派遣と受入は実現できなかったが、創意工夫により、オンラインやビデオレターによる海外交流、留学生を含む在日の外国人や日本人学校あるいはインターナショナル・アメリカンスクールとの交流等を実施した。交流の形態は様々であるが、この報告書に記載されている国を列挙すると、欧州（イギリス、オランダ、フランス、フィンランド）、アジア（中国、台湾、韓国、インド、パキスタン、シンガポール、インドネシア、マレーシア、タイ、ミャンマー、ベトナム、カンボジア、フィリピン、キルギス）、アメリカ（アメリカ合衆国、カナダ、ドミニカ）、オセアニア（オーストラリア、ニュージーランド）、アフリカ（モロッコ、ナイジェリア、ザンビア、南アフリカ、マラウイ）と約 30 か国に及ぶ。新型コロナ・ウィルス感染拡大とうい禍の中、オンライン等の工夫で遠隔交流を実施し、平年よりも数多くの国と交流できたことは評価したい。これらの取組は、今後の国際交流の在り方や方法を考えるうえで、貴重な財産と考えられる。

筑波大学学校群及び教育局は、第 2 期中期目標・中期計画（2010 ～ 2015 年度）で「先導的教育」「国際教育」「教師教育」の 3 つの拠点構想を推進し、第 3 期中期目標・中期計画（2016 ～ 2021 年度）では、この 3 拠点構想を基盤に筑波型の「グローバル人材育成システム」と「インクルーシブ教育システム」の構築を目指してきた。どちらも“境界を越えて”を合言葉に、環境や文化の異なる者同士の交流を通して、互いの個性を尊重し能力を高め合うダイバーシティ社会の実現を念頭に置いている。そして、第 4 期中期目標・中期計画（2022 年度～）では、これらを実現するための高大連携システムのモデル化を目指すこととなった。

グローバル人材育成の観点では、SSH 校及び SGH 校の実績を踏まえ、2019 年度より文部科学省の WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業として、3 年間にわたって新たな国際教育に取組むことになり、最終年度を迎えた。附属坂戸高等学校を拠点校に、高等部のある４つの学校（附属高等学校、附属駒場高等学校、附属視覚特別支援学校、附属聴覚特別支援学校）が連携校となり、高大連携のもとに筑波大学の国際展開力を大いに活用し、活動してきた。特に、11 月に附属坂戸を発信基地として開催された「第 10 回高校生国際 ESD シンポジウム」では、附属 11 校中 9 校から児童生徒、教員、保護者が参加するとともに、2020 年度に加盟した SEAMEO（東南アジア教育大臣機構）を活用し、海外から約 200 校の高校及び大学から生徒・教職員が参加した。これは、最終年度に相応しい成果と評価できる。

現在の日本を取り巻く環境には厳しいものがある。少子高齢化による労働力と経済力の低下や、環境及びエネルギー問題をはじめとする地球規模課題等に立ち向かう、次世代を担うグローバル人材の育成が求められている。これらの社会的なニーズに応えながら、国立大学法人の附属は次世代の人材を育成する新たな教育課程や実践プログラムを開発するミッションを背負っている。環境や文化の異なる海外の人々と協働して国際的社会問題に取り組み、問題提起から解決に至る過程でリーダーシップ及びフォロアーシップを発揮できる人材の育成が必要である。個々の附属学校が全国のセンター的な存在として先導的な教育活動を開発するとともに、筑波大学の国際展開力を活用した高大連携による国際教育活動をさらに推進させ、地球規模課題にも地域的課題にも貢献できる次世代のグローバル人材の育成を目指していきたいと考えている。

（資料）附属学校の国際交流協定締結状況

項目 学校名	締結相手 （国名、機関名）	協定締結日	現締結期間	交流の分野	締結の目的	締結の経緯
附属小学校						
附属中学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属高校	2006.12.1	2011.4.28～ 2016.4.27	中等教育全般	中学校のレベルで、生徒の相互交流の意義とその可能性を考慮したため	北京師範大学と筑波大学との交流を目的として結ばれた協定のなかで、北京師範大学第二附属高校と筑波大学附属中・高等学校及び附属駒場中・高等学校も付随して結ばれたもの。
附属高等学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属高校	2006.12.1	2011.4.28～ 2016.4.27	教育に関する分野	相互の学校交流と生徒間交流	筑波大学が北京師範大学と交流協定を結んだ際、附属高等学校も交流組織の一つとして参加した。
附属駒場中・高等学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属高校	2006.12.1	2011.4.28～ 2016.4.27	北京師範大学附属実験中学との中等教育分野での交流	生徒の国際交流の促進	筑波大学と中華人民共和国北京師範大学との交流協定締結に協力した。
	中華民国（台湾） 国立台中第一高級中学	2015.12.11	2020.12.11～ 2025.12.10	研究発表（主に理系分野）、文化交流など	両校は、学術交流と学校間の提携を促進し、生徒達の国際的な視野の拡大を促進することを目的とする。	2015年4月、相手校から姉妹校協定締結の申し出あり、5月1日に本校校長他が訪問した際に詳細な打合せを行った。5月27日、相手校校長が来校し、詳細事項を詰めた。
附属坂戸高等学校	インドネシア共和国 ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校	2010.12.1	2015.12.1～ 2020.11.30	国際教育・ESD（教員間の教育研究、生徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流および生徒同士の協働的教育活動の実施	交流は筑波大学農林技術センターが2008年に採択を受けた文部科学省「国際協力イニシアティブ」教育協力拠点形成事業に端を発する。その後トヨタ財団「アジア隣人プログラム」の助成を受けた活動や「アジア高校生聞き書きプログラム」などで協働。
	インドネシア共和国 林業省附属林業教育センター	2013.3.19	2013.3.19～ 2018.3.18	国際教育・ESD（教員間の教育研究、生徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流および生徒同士の協働的教育活動の実施	以前からの「アジア隣人プログラム」や「アジア高校生聞き書きプログラム」等でのインドネシアでの活動の際に協力を得たことから交流が始まった。林業教育センター・インドネシア林業省・在日インドネシア大使館の強い要望を受け協定締結に至った。
	インドネシア共和国 国立パダン第6高等学校	2015.9.1	2015.9.1～ 2020.8.31	国際協働学習、ESD、ユネスコスクール間の国際ネットワーク構築	生徒及び教師の異文化理解及び国際的研究活動のため	2012年5月のインドネシアユネスコ国内委員会との交流を契機として、毎年本校と同委員会との交流を深めていった。 2014年ユネスコスクール関係者他が来校し、パダン校から強い関心を示され、2015年本校教諭が訪問し準備を本格的に進めることで合意した。
	フィリピン大学附属ルーラル高等学校	2015.9.1	2016.11.1～ 2021.10.31	国際教育・ESD（教員間の教育研究、生徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流および生徒同士の協働的教育活動の実施	2010年に農林技術センターが開催した「国際農学ESDシンポジウム」において附属高校フォーラムが開催された際に、国際教育担当教員間で連携に向けた協議を開始。その後、卒業研究に関する相互受入・支援、高校生国際ESDシンポジウムにおける協働活動を重ね、2016年に交流協定に関する合意にいたり締結した。
	タイ カセサート大学附属高等学校	2017.11.9	2017.11.1～ 2022.10.31	国際教育・ESD（教員間の教育研究、生徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流および生徒同士の協働的教育活動の実施	2010年に農林技術センターが開催した「国際農学ESDシンポジウム」において附属高校フォーラムが開催された際に、国際教育担当教員間で連携に向けた協議を開始。その後、卒業研究に関する相互受入・支援、高校生国際ESDシンポジウムにおける協働活動を重ね、2017年に交流協定に関する合意にいたり締結した。
附属視覚特別支援学校	タイ視覚障害者支援クリスチャン財団及び財団管理下の盲学校、視覚障害関連教育・福祉施設（タイ）	2020.1.13	2020.1.1～ 2024.12.31	短期留学を含めた生徒間の学習活動の交流 視覚障害教育及び関連分野に関する情報交換	両組織の生徒の交流活動を通して、生徒の国際感覚及び学力の向上を推進する 両国の文化について深く学び合うとともに、視覚障害教育関連の活動を推進し、両国ならびに両組織の発展に寄与する	2015年から2017年にかけて、教育長裁量経費によりタイプログラムを実施。高等部生徒が毎年タイに渡航し、タイの視覚障害生徒との交流が行われた。 2018年度からは、文部科学省トビタテ！留学JAPANの制度を活用し、高等部生徒の短期留学が始まる。今後短期留学を定期的に実施する計画があることから、2019年に協定について打診し、2020年1月に締結に至った。
附属聴覚特別支援学校	フランス共和国 国立パリ聾学校	2003.9.22	2021.9.30～ 2026.9.29	初等中等教育（特別支援教育）における生徒間交流	フランスと日本両国の友好と親善を促進するとともに、両国の聴覚障害教育の発展に寄与する	1999年頃、本校高等部専攻科生徒とパリ聾学校高等部職業科生徒の間で文通を開始した。 2002年、パリ聾学校長から姉妹提携の申し出があり、2003年9月、パリ聾学校にて、交流協定書を交わした。

（2020 年4月～ 2021 年3月）

締結のメリット	協定締結後の構想			その他参考になること
	教員の交流方法	児童・生徒等の交流	その他	
現在、本校は実交流をしていないので、現状ではなし。		現在は特になし	現在は特になし	現在、中学校（中等教育）レベルでの実交流はされていないが、今後将来に向け本協定が両者間（中等教育）にとって有益となる事例を検討していきたい。
相互の文化交流と人的ネットワーク作り及び情報交換	意見交換・情報交換	相互の一日体験入学及び文化交流		2009 年 10 年に相互交流を実施
この協定をきっかけに、2007 年、2008 年に SSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業で訪問することができた。	SSH 事業として北京を訪問	SSH 事業として北京を訪問		
国立台中第一高級中学は理数系に優れ、大学からの指導・サポートを受けていることなど、本学が取り組む高大連携にとって非常に参考になる。	相互訪問・研究交流 （2020、2021 年度はオンライン交流）			
・本校の生徒に交換留学生としてインドネシアに渡航できる機会を与えられる。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・インドネシアから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。④高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	・交換留学（現地校で他の生徒とともに授業等に参加、期間は１ヶ月程度～１年の間で状況に応じて実施） ・プロジェクト活動（SGH 事業における日本およびインドネシアでの合同フィールドワーク、環境問題等についてのネット会議、など）		
異文化理解の促進および協働学習活動を通じての国際教育の実現。センターに附属する５つの学校がインドネシア各地にあり、本校としても活動フィールドを飛躍的に広げられる。付加的要素として将来的にインドネシアから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できるかもしれない。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的交流活動（交換留学含む）		現在、協定延長に関する協議を継続中
・附属坂戸高等学校のスーパーグローバルハイスクール事業に関する支援 ・スーパーグローバル大学事業、大学の世界展開力事業に対する支援 ・ESD およびその後継事業である GAP 活動に関する国際協力 ・生物多様性保全に関する学術交流の促進支援	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的交流活動（交換留学含む）		インドネシアユネスコ国内委員会との連携
・本校の生徒に交換留学生とフィリピンに渡航できる機会を与えられる。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・フィリピンから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。④高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的交流活動（交換留学含む）		
・本校の生徒に交換留学生としてタイに渡航できる機会を与えられる。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・タイから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。④高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的交流活動（交換留学含む）		
生徒の国際的素養や国際感覚を身につけ、将来世界で活躍する視覚障害者を育成することができる。 国際教育拠点の視覚特別支援学校として、日本の視覚障害教育をタイに発信及び展開させていく。またタイのインクルーシブ教育にも貢献できる。	学校訪問、視覚障害教育に関する情報交換等	短期留学プログラムの実施 skype を含む web 会議システムを活用した授業交流		
日本の聴覚特別支援学校（聾学校）を代表する本校が、世界最初の聾学校である国立パリ聾学校と交流関係を持つことは、グローバル化を目指す筑波大学に寄与できる。	教科指導や聴覚障害教育におけるグローバル人材育成についての情報交換および意見交換。	交流会や授業交流（英語・体育等）の実施		

項目 学校名	締結相手 （国名、機関名）	協定締結日	現締結期間	交流の分野	締結の目的	締結の経緯
附属聴覚 特別支援学校	大韓民国 国立ソウル聾学校	2015.6.1	2018.6.1～ 2023.5.31	生徒間の学習活動の交流、聴覚障害教育および関連分野に関する情報交換	両校は、特別支援教育とりわけ聴覚障害教育に関わる教員交流・生徒交流・情報交換を通して、両国の文化について深く学び合うと共ともに聴覚障害教育関連の活動を推進し、両国並びに両校の発展に寄与する。	2008年、筑波大学教員と本校校長他が美術教育におけるＩＣＴ教材の共同研究をすすめるために訪問、その後、本校中学部生徒とのE-mailでの交流活動を行うなど交流協定の基盤を築き締結に至った。
附属大塚 特別支援学校	大韓民国 大邱大学校大邱保明学校	2009.12.29	2009.12.29～ 2014.12.28	知的障害教育の実践・研究（指導法・教育課程・教材教具等）	教員の交流、生徒の交流、共同研究・研究交流の推進、研究成果・研究資料の交換等	筑波大学の障害科学系と大邱大学障害児教育が既に交流協定を締結しており、本学と同様の特別支援学校を有することから、学校間交流にまで協定を広げ、現場での教育実践・研究の国際教育協力を推進する必要があった。
	インドネシア共和国 チパガンティ特別支援学校	2018.2.	2018.2.～ 2020. 2	知的障害特別支援学校における授業研究会をとおした情報交換・交流	・授業研究会による交流において教師の授業力の向上を図る	2017年11月に、本校の教諭２名がチパガンディ特別支援学校を訪問した。授業研究会に参加し、インドネシア教育大学にて日本の知的障害特別支援学校の教育について講演をした。講演には、インドネシア国内から特別支援教育に携わる500人以上の教員が集まり、日本の特別支援教育への関心の高さが窺えた。授業研究交流を通して互いに意見交換を行うことで、双校の教師の授業力の向上を期待できると考えた。
附属桐が丘 特別支援学校	大韓民国 セロム学校 （旧三育再活学校）	2010.2.3	2018.2.13～ 2023.2.12	・児童生徒間の学習活動の交流 ・肢体不自由教育及び関連分野に関する情報交換	・日韓両国の肢体不自由教育の充実と発展に寄与するため。 ・国際教育の視点の一つである日韓の相互理解と親善を図るため。 ・附属学校の中期目標に挙げている“国際教育拠点事業”の一層の充実を図るため。	2007年・2008年、両校の研究部長が双方で開催された研究会に出席し、それぞれ取組を発表。2008年度末、本校の代表生徒１名を含む訪問団を同校に派遣。2009年、校長ほか２名が同校を訪問し、国際交流協定締結に向けた事前調整を実施。同時にスカイプを使った交流授業を開始。2010年２月、再び同校の校長、研究部長等を本校の研究協議会に招聘し、開催前日に国際交流協定を締結。
	台湾 国立南投特殊教育学校	2016.11.24	2016.11.24～ 2021.11.23	・児童生徒間の学習活動の交流 ・特別支援教育及び関連分野に関する情報交換	・両校の交流活動（相互訪問等）や教員間の情報交換を実施しやすくするため。 ・児童生徒の異文化体験の機会を確保し、児童生徒の気付きや学びを複眼的・多角的に深めていくため。 ・日台双方の肢体不自由教育及び特別支援教育の発展に寄与するため。	2014年５月、台湾国立南投特殊教育学校の校務顧問が来校し、国際交流協定締結の可否について打診。これを受け、同年11月に本校校長ほか３名が同校を視察し、国際交流協定の締結の可否について検討。2015年10月、同校校長を含む訪問団が来校し、その際に2016年の国際交流協定締結を約束するに至った。
	台湾 国立和美実験学校	2016.11.25	2016.11.25～ 2021.11.24	・児童生徒間の学習活動の交流 ・特別支援教育及び関連分野に関する情報交換	・両校の交流活動（相互訪問等）や教員間の情報交換を実施しやすくするため。 ・児童生徒の異文化体験の機会を確保し、児童生徒の気付きや学びを複眼的・多角的に深めていくため。 ・日台双方の肢体不自由教育及び特別支援教育の発展に寄与するため。	2014年11月、本校校長ほか３名が、台湾唯一の肢体不自由者を教育する特殊教育学校である同校を視察。2015年11月、本校副校長ほか２名と代表生徒２名で同校を訪問し、国際交流協定締結の可否について打診。その際、2016年の国際交流協定締結について内諾を得た。
附属久里浜 特別支援学校	中華人民共和国 浙江省寧波市 達敏学校	2016.8～ 2021.8	2011.8.29～ 2016.8.28	・教員間の教育実践研究 ・児童生徒間の教育活動	・日中両国の自閉症児教育の充実と発展に寄与するため。 ・日中の相互理解と親善を図る。	2009年５月、中国寧波市達敏学校校長が本校を訪問し教育実践を視察の結果、本校への教員派遣・研修の実施の希望があり、３回にわたって教員研修の受け入れを実施。2011年度、達敏学校が全中国の特別支援学校の研究指定校となり、国際的な研究会議や研究発表等の実施を予定していたため、それに向けて本校との姉妹校協定締結について申し出があり、同年８月29日に協定書を交わした。2016年８月に締結期間を５年延長。
	中華人民共和国 江蘇省蘇州工業園区 仁愛学校	2014.9.28	2014.9.28～ 2019.9.27	・教員間の教育実践研究	・日中間の文化交流を深め、両国の特別支援教育領域の促進を図るため。	2014年１月、副校長と小学部主事および幼稚部教諭の３名で中国江蘇省蘇州工業園区仁愛学校の求めに応じ視察を行った。その後、立命館大学に留学予定のある教員が本校の実践研究協議会に参加した。同校の校長や教員から、本校への教員派遣・研修の実施の要望があり、2014年９月の２度目の視察の際に日中自閉児教育研究会を同校にて実施するともに、本校との姉妹校協定締結を行った。

締結のメリット	協定締結後の構想			その他参考になること
	教員の交流方法	児童・生徒等の交流	その他	
スーパーグローバル大学である本学の附属学校として、聴覚障害教育の専門性の向上に貢献でき、韓国の特別支援教育に関する最新情報（障害者の権利に関する条約批准の状況、教育課程、教科書等）を得ることができる。	学校訪問、情報交換	ネットワーク回線を利用した遠隔地間授業交流	研究会等での発表	
両国が同じような教育条件・教育環境にあることから、特別支援教育に関してアジアからの情報発信ができる。特別支援学校が５校（視覚障害・聴覚障害・肢体不自由・情緒障害・知的障害）あることの共通性を生かして、他４校の交流に発展できる。	両校とも校費による海外出張で相互に交流する。	メールや HP などを通じて幼児児童生徒間の交流を進め、将来は高等部修学旅行を韓国として、大邱保明学校への交流訪問を実現させたい。		大邱保明学校には、日本語に比較的堪能な教諭がおり、大邱大学教員（洪先生 本学障害科学系 DC 修了）が通訳しなくても交流が可能であることが分かった。
・授業研究交流を通して互いに意見交換を行うことで、双校の教師の授業力の向上を期待できる。 ・交流を通して得られた知見の発表し、知的障害教育の実践分野における国際教育拠点として貢献できる。	互いの学校の授業研究会に教諭をそれぞれ派遣し、情報交換、意見交換を行う。 授業研究におけるＷｅｂ会議を通して、教員間の相互の専門性の向上を図る。事前に授業研究の動画と指導計画（翻訳済み）を確認してから研究会議に臨む。	Ｗｅｂ環境を整え、今後生徒間の交流をインターネット回線やビデオレター等を使って交流を実施させたい。		交流時期と両国を結ぶ通訳者の安定的な供給が必要である。その為の予算確保。
・お互いの学校の研究テーマに沿って意見交換、情報交換ができる。また、研究発表の場を相互に設けることができる。 ・児童生徒の異文化理解を広げ、海外の児童生徒とコミュニケーションする機会を確保することができる。（外国語学習への意欲を高める。） ・筑波大学と桐が丘特別支援学校の存在を韓国でより広く知ってもらえる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換、研究会参加、研究成果共同出版。	学校訪問、ビデオレター等の交換、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介、スカイプを使った交流授業。		2010 年、高等部３年が韓国に修学旅行で渡航し、三育再活学校（現セロム学校）を表敬訪問。当初、高等部生徒による交流活動だけであったが、2012 年より小学部児童・中学部生徒も交流活動に加わるようになった。
・韓国セロム学校との国際交流に加え、新たに台湾交流を始めることにより、児童生徒の異文化理解の場を広げることができる。 ・国際教育拠点事業の拡充につながる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換。	学校訪問、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介、スカイプを使った交流授業。		現時点では、高等部生徒による交流活動のみ。
・韓国セロム学校との国際交流に加え、新たに台湾交流を始めることにより、児童生徒の異文化理解の場を広げることができる。 ・国際教育拠点事業の拡充につながる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換。	学校訪問、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介。スカイプを使った交流授業。		現時点では、高等部生徒による交流活動のみ。
特別支援学校関係での中国との交流は、まだ十分とは言えず、この交流が実現すれば、今後のこの分野における教育の充実の基礎となることが期待される。	・自閉症児への指導方法、指導内容等にかかわって、研修交流及び研究にかかわる指導助言。	予定なし	達敏学校の教育実践の様子を視察するとともに、実践研究について交流し、必要に応じて指導助言する予定。また 2012 年度の達敏学校を会場として行われた研究会に参加した。	2012 年度は訪中して達敏学校の授業参観や研究会の具体化を計画したが、日中関係の悪化によって見合わせた。ただし、日常的にカンファレンスなどの実績ができるよう、通信環境や機材の整備を行った。訪日した校長や副校長と今後の交流の在り方に関する意見交換を行った。 2017、2018 年度と２回に分け、達敏学校の全教員の研修を受け入れた。
中国は近年自閉児教育の充実に力点を置いていて、日本の教育的支援を強く希望している。両国の自閉症を中心とした特別支援教育の発展に向けて本校が貢献できるよい機会となる。	・自閉症児への指導方法、指導内容等にかかわって、研修交流及び研究にかかわる指導助言。2015 年以降は、本校の公開授業の動画データなどを用いて、skype によるケースカンファレンスや授業研究会などを定期的に行っている。	本校のきらきらコンサート、運動会などの催しを skype にて配信し、児童間の交流も行う予定である。	定期的に同校から教員の派遣を受け入れ、本校において研修を行う予定である。	

締結・更新の記録

年　　度	学　校　名	新規／更新	相手校・機関
平成 21（2009）年度以前	附属中学校	新規	北京師範大学第二附属高校（中華人民共和国）
	附属高等学校	新規	〃
	附属駒場中・高等学校	新規	〃
	附属聴覚特別支援学校	新規	国立パリ聾学校（フランス共和国）
	附属大塚特別支援学校	新規	大邱大学校大邱保明学校（大韓民国）
	附属桐が丘特別支援学校	新規	三育再活学校（大韓民国）
平成 22（2010）年度	附属坂戸高等学校	新規	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
平成 23（2011）年度	附属中学校	更新	北京師範大学第二附属高校（中華人民共和国）
	附属高校	更新	〃
	附属駒場中・高等学校	更新	〃
	附属久里浜特別支援学校	新規	浙江省寧波市達敏学校（中華人民共和国）
平成 24（2012）年度	附属坂戸高等学校	新規	林業省附属林業教育センター（インドネシア共和国）
平成 26（2014）年度	附属桐が丘特別支援学校	更新	セロム学校（旧三育再活学校）（大韓民国）
	附属久里浜特別支援学校	新規	江蘇省蘇州工業園区仁愛学校（中華人民共和国）
平成 27（2015）年度	附属駒場中・高等学校	新規	国立台中第一高級中学（中華民国（台湾））
	附属坂戸高等学校	更新	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
	〃	新規	国立パダン第６高等学校（インドネシア共和国）
	附属聴覚特別支援学校	更新	国立パリ聾学校（フランス共和国）
	〃	新規	国立ソウル聾学校（大韓民国）
平成 28（2016）年度	附属小学校	新規	光州松源書等学校（大韓民国）
	附属坂戸高等学校	新規	フィリピン大学附属ルーラル高等学校（フィリピン共和国）
	附属桐が丘特別支援学校	新規	国立和美実験学校（台湾）
	〃	新規	国立南投特殊教育学校（台湾）
平成 29（2017）年度	附属坂戸高等学校	新規	カセサート大学附属高等学校（タイ）
	附属大塚特別支援学校	新規	チパガンティ特別支援学校（インドネシア共和国）
	附属桐が丘特別支援学校	更新	社会福祉法人 SRC 附属広州セロム学校（旧セロム学校）（大韓民国）
平成 30（2018）年度	附属聴覚特別支援学校	更新	国立ソウル聾学校（大韓民国）
令和元（2019）年度	附属視覚特別支援学校	新規	タイ視覚障害者支援クリスチャン財団及び財団管理下の盲学校、視覚障害関連教育・福祉施設（タイ）
令和２（2020）年度	附属駒場中・高等学校	更新	国立台中第一高級中学（中華民国（台湾））
令和３（2021）年度	附属聴覚特別支援学校	更新	国立パリ聾学校（フランス共和国）

（資料）報告書発行の記録

第１集（2007 ～ 2008 年度） 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想に関わって～	2009 年２月発行
第２集（2009 ～ 2010 年度） 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2011 年７月発行
第３集（2011 年度） 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2012 年３月発行
第４集（2012 年度） 新たな国際教育の展開 ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2013 年３月発行
第５集（2013 年度） 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～グローバル人材の育成を目指して～	2014 年３月発行
第６集（2014 年度） 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～グローバル人材育成の充実を目指して～	2015 年３月発行
第７集（2015 年度） 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～ダイバーシティ共生社会を創る人材育成の発展を目指して～	2016 年３月発行
第８集（2016 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2017 年３月発行
第９集（2017 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2018 年３月発行
第 10 集（2018 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2019 年３月発行
第 11 集（2019 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2020 年３月発行
第 12 集（2020 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2021 年３月発行
第 13 集（2021 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2022 年３月発行

令和３年度附属学校国際教育推進委員会名簿

委員長	濱　本　悟　志	委員長（教育局特任教育長補佐）
	梶　山　正　明	副委員長（教育長補佐）
	溝　上　千惠子	教育長
	雷　坂　浩　之	教育局次長
	下　山　直　人	教育局・教授
	飯　田　順　子	教育局・准教授
	木　村　範　子	教育局・講師
	久　保　尊　洋	教育局・特任助教
	佐々木　昭　弘	附属小学校校長
	荒　井　和　枝	附属小学校　教諭
	植　野　伸　子	附属中学校　教諭
	河　野　雅　昭	附属高等学校　教諭
	八　宮　孝　夫	附属駒場中・高等学校　教諭
	吉　田　賢　一	附属坂戸高等学校　教諭
	青　松　利　明	附属視覚特別支援学校　教諭
	鎌　田　ルリ子	附属聴覚特別支援学校　主幹教諭
	小笠原　志　乃	附属大塚特別支援学校　教諭
	小　薗　慶　子	附属桐が丘特別支援学校　教諭
	河　場　哲　史	附属久里浜特別支援学校　教諭